



**SPANISH ARISTOCRAT, FORCED BRIDE**  
by India Grey

Copyright © 2009 by India Grey

All rights reserved including the right of reproduction in whole or in part in any form. This edition is published by arrangement with Harlequin Enterprises II B.V./ S.a.r.l.

® and TM are trademarks owned and used by the trademark owner and/or its licensee. Trademarks marked with ® are registered in Japan and in other countries.

All characters in this book are fictitious. Any resemblance to actual persons, living or dead, is purely coincidental.

Published by Harlequin K.K., Tokyo, 2012

ストーウエル城のなめらかな芝生にヘリコプターの影が差し、八月の熱気とあたりに茂る木立の樹冠をかき乱した。

操縦しているトリスタン・ロメロ・デ・ロサダ・モンタルボが眼下に目を向けると、パーティはすでにたけなわとみえ、エメラルドグリーン of 芝生に散る奇抜な衣装のゲストたちの間を、シャンパンのトレイを持ったウエイターが忙しく立ち動いているのが見える。芝生の向こうに設営されたテントから出てきた人々が、傾きかけた太陽に手をかざし、ヘリコプターの到着を見守っているのを、トリスタンは無感動に眺めた。

二〇一〇年八月イギリス

1

トム・モンタギューが主催する仮装舞踏会は、今年も盛大に執り行われていた。世界中から社交界や貴族社会のセレブリティが集まり、ストーウエル城の広大な敷地の中で、贅を尽くした快楽の二十四時間を過ごす。

だが、トリスタン・ロメロがはるか三千キロ彼方の地獄から馳せ参じたのは、そんな一時の享楽のためではなく、親友のトムのためだ。

トリスタンは力なくため息をつき、ヘリコプターを旋回させた。テントがはためき、ガレオン船の帆のように張りつめる。第七代コートブルック伯であるトム・モンタギューは、想像できる限りの善人で、気前のよさでも群を抜いている。要するに、トリスタンに言わせれば、女たちの格好のカモだ。トムはいつも、相手のいいところしか目を向けない。たとえその長所がほかの人には見えなくても、彼にしか見えない形で目に写るようだ。だからこそ、僕との友情もこれだけ続いたのだろうか。トリスタンは皮肉まじりに思った。そして彼が、トムの意中の女性をこの目で確かめ、本当に彼にふさわしいかどうか見極めてやらなければと感じているのも、そのためだった。

だがもちろん、理由はそれだけではない。

結局のところ、トリスタンが今ここにいるのは、パラッパやゴシップ記事のライターたちに彼の登場を期待されているからだ。ストーリーウエル城の北側の境界を形成する川に沿ってヘリコプターを下降させながら、日差しを受けてきらめくカメラのレンズが見えないか、彼は川岸の木立に目を凝らした。

連中がそこにいるのは間違いない。あの木立のどこかに潜み、機会をうかがっているのだろう。なにが真実かなんて関係ない。彼らにとつてこれはゲームではないのだから。ゴシップ好きの読者が喜ぶようなネタをつかむ。それができなければ、でっち上げる。

要するに、利用するか、されるかだ。

どちらが相手を手玉に取り、どちらが手玉に取られるか。

そしてトリスタンは、もう二度と手玉に取られるつもりはなかった。

リリー・アレクサンダーは、華やかな衣装をまとった人々の群れから夢見心地で抜け出した。手にしたシャンパンは極上のヴィンテージで、古代ギリシャの女神のよう

なドレスは、お気に入りのメゾンのものだった。素足の下に広がる芝生は青々としてやわらかく、今この瞬間、ここはこの世の楽園だった。

それなのに、なにかが欠けているような気がする……。

ロンドンのモデル仲間たちはみな、ストーウエル城の仮装舞踏会は、おとぎの国のようなだと羨望のまなざしでリリーを見送ったが、彼女にはまだ、どんな魔法も見えなかった。

沈みゆく夕日の前をなにかが横切り、ピンクと金色に染まった夕方の庭に影が差した。親友のスカーレットを捜しながら、リリーは頭の中に鳴り響く脈動を感じていた。まるで第二の心臓のように規則的なリズムを刻み、胸の高鳴りをあおっている。

仮装舞踏会の今年のテーマは、神話と伝説だった。太陽が長い影を投げかける芝生には、ゆるやかなドレスに輝く翼をつけた娘たちや、往年の銀幕スターに扮した装いの人々が入り乱れている。会場の端にはいくつかテントが設営され、スカーレットの話では、のちほどスタント騎手によるパフォーマンスがあるという。

きつとユニコーンにでも乗って現れるのね。リリーは思った。

生暖かい風が吹きつけて、堂々とした柵の大木を騒がせ、枝を大きくしならせた。

明日の今頃は、はるかアフリカの不毛地帯にいて、この場のすべてが夢のように思えるに違いない。リリーは、華やかで住み慣れた上っ面だけの世界を飛び出し、これまで新聞やテレビでしか知らなかった世界の深みに飛び込むつもりだった。こうして神経質になっていられるのも無理はない。でも、神経質というよりは……。

気持ちが悪く落ち着かず、じっとしていられない感じ？

どこからともなく飛びこんできたその言葉は、頭の中でぐるぐるとまわりながら、しだいにポリウムを上げていった。あたりの緊張感に気づき、彼女はふと頭上を振り仰いだ。上空でヘリコプターが滞空している。その姿に、リリーは催眠術にかかったようにぼんやりと見入った。杏色の空を切り刻む回転翼は、邪悪な肉食獣のようだ。轟音の中、ふいに手の中の携帯電話が震え出し、リリーは我に返った。パーティの喧噪が相手に聞こえないよう、リリーは電話を耳に押し当てた。かけてきたのは、彼女が明日から仕事をする、アフリカの子供のためのチャリティ団体の責任者だった。

「ええ、大丈夫よ。ありがとう、ジャック。出発の準備はすべて整ったし……」

だがジャック・デビッドソンの声はほとんど聞こえない。静かに話せる場所を探して、リリーは足早に芝生を歩き始めた。

「聞こえてるわ」彼女は大声で答えた。「ごめんなさい、電波が悪いみたいで——」  
リリーは下を向き、耳の奥に響いてくる声にひたすら意識を集中させた。ジャックは旅の日程について説明しているが、孤児 や 食料センター といった言葉がひどく場違いに聞こえた。リリーはとにかく歩き続け、城の端にある大きな石造りの尖塔をまわりこんだ。しばらくすると青々とした芝生が途切れ、あたりに枯れ草が広がり始めた。ここまで来ると、さすがにパーティの騒ぎは気にならないが、逆に、ヘリコプターの音はますます大きくなり、まるで嵐の中にいるようだ。

上空から、トリスタンは笑みを浮かべて彼女の姿を見下ろしていた。

薄い金髪と枯れ草の色がひとつに溶け、最初はそこに彼女が立っていることにも気づかなかつた。金色の葉を編んだ冠を頭にのせた姿は、さながら収穫の女神のようだ。ヘリコプターが巻き起こす風の中で、長い髪が豊かに波打ちながらたなびいている。風にはためくドレスを懸命に押さえようとしているが、携帯電話を耳に当て、もう一

方の手でシャンパンの入ったグラスを持ち、さらに髪まで押さえようとしているので、虚しい努力に終わっている。

彼女の正面にヘリコプターを着地させたトリスタンは、つい誘惑に駆られ、回転翼のスイッチに指をかけたまま、はためくドレスからのぞく小麦色の脚をしばらく眺めていた。

ヘッドセットをはずして操縦席から飛び降りながら、彼はふと、彼女の顔になんとなく見覚えがあるのに気づいた。風がびたりとやみ、彼が近づいていくと、髪を後ろにかき上げた彼女の顔がはつきり見えた。

以前寝たことのある女だろうか。

いや。ここまですばらしい身体をした女を忘れるはずがない。すらりとした長身に、優雅な身のこなし。これほどの女と寝ていたら、忘れられない一夜になっているはずだ。トリスタンの疲れた体の奥で、欲望が頭をもたげた。彼女はいまも下を向き、電話の会話に没頭している。彼が近づくとつれ、声が聞こえてきた。

「ええ、大丈夫。大事なことは全部メモしてあるわ」

こんなに美しい女が、近づいてくる男にまるで気づかないとは、なんとも無防備だな——トリスタンは強く心を惹かれた。

彼女が会話を終え、彼を見上げたときだった。

トリスタンの体を、電流のようなショックが駆け抜けた。金色の髪と同じ淡い色合いの肌とは裏腹に、彼女の目はひんやりと澄んだ銀色で、早朝の湖にたちこめる朝靄あさもやを思わせた。

「八時三十分」彼女は自分に言い聞かせるように、声に出して言った。息遣いがかすかに浅く、その目はまっすぐに彼を見ているようである。なにも見えていないようでもある。「明朝、八時半に、ヒースロー空港の第一ターミナル」

彼女の方へ近づきながら、トリスタンはいたずらっぽい笑みを浮かべた。「明日の朝、ベッドで目覚めたときに僕が思い出させてあげようか」

もちろんそれは冗談だし、彼は立ち止まる気もなかった。だがそのとき、ふたつのことが同時に起こった。

まず蝉の羽音のようなシャッター音がして、木立の陰でフラッシュが光った。

そして、この世のものとも思われぬ彼女の銀色の目に、欲望が影を落とした。

トリスタン・ロメロは多くの才能に恵まれているが、その中でも、女性を口説くこととマスコミを翻弄することにかけては、苦勞をしたことがなかった。彼は見事な早技で彼女の腰に腕をまわすと、抗議の隙を与えず抱き寄せた。

リリーが最初に意識したのは、彼の目だった。

短くカットされた黒髪と、金色に焼けた肌。わずかに伸びたひげが頬に影を落とし、その顔をますます険しく見せている。そしてそのブルーの瞳を見た瞬間、激しいショックにとらわれた。紐で喉を締められているように、息が苦しい。

なんてきれいなブルーなの。溺れてしまおう……。

彼の言葉はもちろんジョークに決まっているが、リリーの身体はそうは受け取らなかった。ブルーの瞳に引きこまれて、映画のワンシーンのように時間が止まり、背景が消えた。耳元で激しく打つ脈の音以外、なにも聞こえない。全身の肌が熱くほてり、身体が刺すようにうずく。

すると、彼がいきなりリリーを抱き寄せた。もはや溺れるどころではない。リリーの身体中が燃えていた。彼のキスはまさに、魔法だった。巧みで、驚くほど優しいキス。沈みかけた太陽が落ちてきて、まるで世界を焼き尽くそうとしているかのようだ。だが助けを求めたいとは思わなかった。彼の手を背中に感じながら、リリーはなすすべもなく寄りかかっていた。携帯電話とシャンパングラスを手にしたまま、唇を開いて彼を迎える。閉じたまぶたの内側で、快楽の炎が闇をまぶしく照らし出す……。

「そこにいたのか！」

遠くで声がし、彼がわずかに顔を上げた。一瞬、リリーはブルーの瞳をよぎる切なさに気づいたが、それはすぐにかき消え、彼はリリーから手を離れた。

リリーがぼんやりと振り返ると、手をつないで歩いてくるトムとスカレットの姿が見えた。

「やっと着いたんだな」トムがにこにこしながら呼びかけ、空から舞い降りてリリーの唇を奪った男のそばまでやってきた。聖ゲオルギウスの衣装に身を包んだ甘いマスクのトムが、危険な魅力を漂わせた見知らぬ男のそばに並んで立つ姿は、不思議な純

粹さと気高さを感じさせた。「なるほど、リリーとはもう会ったのか」トムはくつろいだ調子で指摘した。

「リリーというのか……」たった今まで彼女の唇に触れていた口元に皮肉な笑みを浮かべ、ブルーのまなざしが月桂樹の冠とギリシャ風のドレスに向けられた。「名前がわかってよかったよ。トロイのヘレネか、収穫の女神デメテルか、迷っていたんだ」

リリーは頬が赤らむのが自分でもわかった。ドレスは数年前に撮影で使ったものだ。もつと気の利いた服を着てくればよかった。スカーレットはココ・シャネルを意識した黒のワンピースにダイヤモンドを飾り、息をのむほどすてきなのに。

「どちらかといえば、トロイのヘレネのつもりだったけど……」リリーは視線をそらしたまま、おずおずと打ち明けた。

「そうだろう。絶世の美女、ヘレネ。君は香水の広告に出ているモデルだろうか？」

うなずくと、驚いたことに彼はいきなりリリーの手首をつかんだ。その手をゆっくり持ち上げられ、てつきりキスをされるかと思いきや、彼は顔を近づけて香りを吸いこんだ。

「まさか本当に、こんなすばらしい香りがするとは思わなかったよ」

その声はリリーの身体の中に入りこみ、これまで誰にも触れられたことのないころまで届いた。彼の英語は完璧だが、かすかなスペイン語訛が感じられる。

「その……今は香水はつけてないのよ」言葉がつかえた。「今夜はなにも」

ああ、今のは本当に私の声？

「そうか」口元の笑みは温かそうだが、ブルーの瞳にぬくもりはない。「想像をかき立てられるな」

彼は一瞬だけリリーを見つめ、すぐに目をそらした。

リリーは戸惑った。さらわれて洗脳されたあとで、いきなり元の世界に突き返されたかのようだ。

トムが恋人を前に押し出し、おどけた礼儀正しさを装って言った。「スカレット、紹介しよう。我が旧友のトリスタン・ロメロ・デ・ロサダ・モンタルボ——モンテサ侯爵だ」

リリーの心臓が、電気ショックを受けたようにびくと跳ねた。

トリスタン・ロメロ・デ・ロサダ・モンタルボ——なぜ気づかなかつたのだろう。

だが正直、新聞や雑誌の写真を見ただけでは、ブロンズ色に輝くモンテーサ侯爵の生身の美しさは伝わらない。

紹介がすんで、スカレットがそばに来た。リリーは彼女の腕をつかみ、男性たちのそばを離れた。

「トムの親友ってトリスタン・ロメロだったの？ あのスペイン貴族の銀行家の？」

スカレットはおもしろがるように答えた。「そうなのよ。お互いまだ小さい頃に厳しい寮にほうりこまれて以来のつきあいらしいから、きっと私たち以上ね」

リリーはめまいがした。今も残るキスの悦びとあいまって、ショックと屈辱がこみ上げる。あんなにあっさり和我を忘れてしまうなんて。「でも、トムはあんなにいい人なのに……」彼女は口ごもった。「トリスタンは……その、遊び人で……」

「リリー」スカレットはたしなめた。「新聞に書いてあることを鵜呑みにしちゃうだめよ。少なくとも、書いてあることがすべてじゃないわ。トムは、トリスタンの悪口

には絶対に耳を貸さないのよ。学生時代にいじめられそうになったとき、一度ならず助けてもらったらしくて。でも……」彼女は探るようなまなざしを向けた。「どうして彼のことを知ってるの？ タブロイドを読むわけでもないでしょうに」

「誰だって知ってるわ」城の方へ戻りながら、リリーは答えた。「そんなの読むまでもなく、一般紙や金融紙でもロメロの名前はいくらかでも出てくるもの」

昨今の厳しい経済環境にもかかわらず、ロメロ銀行が非情な手段に訴えて金融界のトップに立ち続け、ロメロ一族が強大な権力と富を享受していることに関してはさまざまな記事が賛否両論の見解を書きたてている。

「それで、彼はなにに扮してるの？ ジェームズ・ボンド？」

「彼は特別よ。彼は、あくまでも彼なの。伝説のプレイボーイで快樂の神というわけ。今日もどこかのヨットパーティーだか美女のベッドだかを抜け出して、直接ここへ来たらしいわ」スカーレットはくすりと笑い、あわてて声を落とした。「きつと、よつぱど急いでたのね。シャツのボタンがずれてるのを見て」

リリーはとっさに振り返り、彼の胸に目をやった。たしかに、見るからに仕立ての

いい黒いスーツにはかすかにしわが寄り、中のシャツは片方の襟だけ大きく開いて、濃い金色の肌と鎖骨がのぞいている。

さっきのキスで私はあれだけ刺激されてしまったのに、彼はほかの女性のベッドを抜け出して熱も冷めやらぬ状態だったっていうの？ リリーの胸に、熱い怒りがこみ上げた。

その一方で、身体の奥では今も欲望が騒ぎ、それでもかまわないと訴えている。とにかく、リリーはもう一度彼とキスをしたかった。

「大丈夫か？」パーティ会場に戻り、バーコーナーのあるテントに向かいながら、トムが小声で尋ねた。

トリストアンはぞんざいにうなずいた。「遅れて悪かった。なかなか抜けられなくて」「僕の方はなんでもないよ。ただ、君の女性ファンたちが我慢の限界に達しつつあって、君の居場所について僕に答えられることも尽きてね」

「表向きは、サントロペでホームパーティに出てたことになってる」

トムはにやりとした。「どうやら、相当なパーティーだったらしいな。シャツのボタンをはめ直した方がいいぞ。暴動が起こる前に」

トリスタンはシャツを見下ろし、顔をしかめた。着陸の際に急いで着替えたのだが、疲れてものを考えられる状態ではなかった。〃年間最大の社交イベント〃に顔を出すには、およそ理想のコンディションとは言いがたい。

やわらかな空気の中、テントからとぎれとぎれに音楽が流れてくる。今夜もまた、眠れぬ夜になりそうだ。

「表向きはそういうことだとして、実際は？」トムの声がまた低くなる。

「カザキミールにいた」前を向いてシャツのボタンをはずしながら、トリスタンは抑揚のない声で答えた。

トムは顔をしかめた。「そうでないことを祈ってたんだが。情勢は、かなり厳しいんだろう？」

東欧の片隅にある小さな村、カザキミールの名は、この十年來の戦争のおかげで、すっかり絶望と暴力を象徴するようになってしまった。戦争の当初の目的など、もは

や誰も覚えていない。血にまみれ腐敗しきった軍事政権と、ひと握りの麻薬王が権力を握り、人民の間に少しでも不穏な動きが見られれば、容赦なく叩きつぶす。先週は、村全体が襲撃されて廃墟と化したというニュースが伝えられた。

「そうだな」一瞬、記憶の扉が開きかけ、トリスタンの頭の中にあるイメージが押し寄せた。彼はあわてて扉を閉めた。「運転手が巻きこまれた。身重の妹を除いて、彼の家族はみんな殺されたよ」彼は苦い笑みを浮かべた。「軍の連中は、ロメロ銀行の資金提供で手に入れた真新しい武器を、抜け目なく利用しているんだろう」

トムはテントの前で立ち止まり、トリスタンの腕に手をかけた。「大丈夫か？」

「ああ」トリスタンはそっけなく答えた。「僕がどうという人間かは知ってるだろう。面倒な人間関係には立ち入らない。向こうへは実務的な用で出かけただけだ。収支を合わせにね」

そう答えながら、彼は友人の背後の薄闇にひっそりと横たわる湖に視線を向けた。霧に包まれた湖の中央には、古い塔がそびえている。彼の顎がぴくりと動いた。

「なにか僕にできることがあるば……」トムが静かに言った。

「トリスタンは皮肉のこもった笑みを向け、酒の香りが充満した暖かいテントに足を踏み入れた。「しばらく鳴りを潜めていたから、マスクミの連中にサービスでもしよかな。僕と向こうでの活動を結びつけるような情報が漏れたら、悪夢の事態を引き起こしかねない」

トムは自分もテントに入り、笑顔でほかのゲストにうなずいた。「そういうことから簡単だ。パパラッチよりは文明的なカメラマンも来てるよ。社交欄担当の連中がね。もっとも、君がどこかの有名なカメラマンということになれば、彼らも文明にかまってはられないだろうが」トムはバーコーナーのトレイからグラスを二個取り、ひとつをトリスタンに渡した。「乾杯。それで、相手は誰にする?」

「リリーだ」トリスタンはショットグラスを一気に傾けた。

トムの顔が曇った。「それはだめだ。彼女はよくない」

「どうしてだ? 彼女は有名人だろう?」それに美人だ。こんなに疲れているのに、さっきは愕然とした。それどころか、彼女を抱き締めて銀色の瞳を見つめたときには、まるで……。

まるで、自分が人間に戻れたような気がした……？

「だが、スカーレットの親友だ」トムはきつぱりと釘を刺した。「君が彼女を苦しめるようなことになれば、僕まで困った立場に追いこまれる」

「どうして僕が彼女をそんな状況に追いこむと言える？」トリスタンは二杯目のグラスを手に取り、落ち着きなくあたりを見まわした。「彼女はモデルだろう？ カルテイエかなにかの高価なアクセサリーでも手に入れて、知名度が上がれば満足するさ。そしてマスコミは望みどおり、僕のことを能天気なプレイボーイに仕立て上げ、僕は連中の注意をはぐらかす。みんながハッピーというわけだ」

それでもトムは心配そうだった。「彼女はそういう女性じゃないと思うよ」

「君は人がよすぎるんだよ、トム」トリスタンはむつつりと応じ、グラスの中身を飲み干した。「世の中は、そういう人間ばかりなんだよ」

## 2

夕闇が訪れ、魔法を運んできた。木立を飾るランタンが淡い輝きを放ち、紫色の空に星がまたたいて、ダイヤモンドをちりばめたようだ。

だがリリーは驚かなかった。これが魔法だったのね。

もう今夜は、なにかがあってもおかしくない。

先ほどウエイターから受け取ったカクテルに口をつけようとしたとき、木立の陰から森の精に扮した娘たちが、額にユニコーンの角をつけた白馬に乗って現れた。

のびやかなバイオリンの独奏が続いて、荘厳なオーケストラの音楽が流れ、曲馬のシヨーが始まった。妖精たちを乗せた馬が縫うように行き交い、後ろ脚で立ったり回転したりするのを眺めるうちに、リリーはだんだん夢を見ているような気分になった。

一度だけ、シヨを挟んで真向かいに立つトリスタンと目が合った。彼はシャツのボタンをなかばまで開き、ポカホントスに扮した有名なハリウッド女優に腕をまわしていた。リリーの胸になぜかちくりと痛みが刺して、彼女は思わず目をそらした。

次に見たとき、トリスタンの姿はすでになかった。

カクテルは味見をしただけで、結局、ほとんど飲まなかった。それでなくても気持ちにはなにか落ち着かず、体の奥で欲望が騒いでいる。こんなそわそわしたまま酔ったりしたら、事態はますます悪くなりかねない。

曲馬のシヨが終わり、ユニコーンは木立の奥に姿を消した。リリーはスカレットに話しかけようと振り返ったが、彼女は少し離れたところにトムと並んで立っていた。トムはスカレットの腰に腕をまわして抱き寄せ、リリーが見ていることにも気づかず耳になにかささやきかけている。スカレットも、ほほえみながらトムにびつたりと寄り添っている。

胸の奥に小さく痛みを覚え、リリーは顔をそむけた。

彼女とスカレットのつきあいは、ブライトンで過ごした子供時代までさかのぼる。

お互いひよる長い体つきを周囲にからかわれていたので、ふたりはいつもいっしょにいた。そしてある日（ザ・レーンズ）で買い物をしていたとき、有名なモデル事務所を経営するマギー・メイソンに見初められ、ロンドンで面接を受けた。リリーは大学へ行くつもりだったので、スカレットがいなければマギーの名刺を受け取ることもなかっただろう。けれども結局、ふたりともその世界に足を踏み入れた。性格はまるで違うにもかかわらず、リリーとスカレットは常にふたりでひとり。いつ、どんなときもいっしょだった。

だからこそ、スカレットのために喜ぶべきでしょう？ リリーは自分に言い聞かせた。トムはすてきな男性だわ。相手が彼で、本当によかった。

これがもし、トリストアン・ロメロだったら……。

先ほどのバイオリン奏者が、ふたたびソロで演奏を始め、また一頭、別の馬が登場した。今度は鞍に美しい翼をつけている。群衆の間にどよめきが広がった。馬上の娘が手にしたバスケットのふたを開けた瞬間、人々は息をのんだ。

ひとかたまりの白い鳩の群れがバスケットから飛び立ち、せわしなく羽ばたきなが

ら螺旋を描いて空へ上っていった。群れは紫色の光の中で、突然の自由に戸惑うかのように、一瞬、羽ばたいたまま空中に留まった。すると向かいの群衆の間でなにかが動き、リリーがふと顔を向けると、ちょうどロビンフッドの扮装をした男が弓を構えて矢を放つところだった。

男のまわりでやじが飛んだ。はっとして空に目を戻すと、一羽の鳩が身を震わせ、羽根があたりに飛び散った。リリーのいる場所からも脇腹に刺さった矢が見えた。その矢に引っ張られるように鳩は落ちていく。だが奇跡的に墜落は免れ、傾いた姿で羽をばたつかせながら、湖の方へ下りていった。

リリーは抑えきれない怒りに駆られた。ショーが終わり、人々は次のお楽しみを求めて移動を始めたが、リリーは湖を指して駆け出した。足の裏の芝生がひんやりとして湿り気をおび、湖に近づくにつれて地面がやわらかくなった。彼女は伸びた草を押し分けて進み、あたりを見まわした。浮き草に覆われた湖の中央に、こんもりと小島が浮かんでいる。

島には崩れかけた石の塔があり、しだいに暗くなっていく紫色の空に映る黒い影の

ように立っている。静けさのなか、せわしない羽音がしたかと思うと、塔の上の崩れた墨壁から鳩がいつせいに飛び立った。リリーは振り仰ぎ、怪我した鳩を捜して目を凝らした。まだ矢が刺さっていたら、どうしよう？

けれども目が痛くなるまで見つめても、薄闇の中ではなにもはつきりとは見えなかった。諦めて引き返そうとしたそのとき、塔の後ろに板敷きの小さな橋が見えた。橋は湖の反対側の岸から湖の真ん中に浮かぶ島まで延びている。リリーは急いでそちらへまわった。ドレスの裾がいばらに絡まり、湿った草が脚にまつわりついた。橋は古びてすべりやすくなっていたが、おそるおそる足をのせると、意外にもまだしっかりしているようだった。一步一步、ゆっくりと板敷きの橋を踏みながら、リリーは塔からかすかに聞こえる鳩の鳴き声に耳をすませた。

暖かい夕べだったにもかかわらず、リリーの身体は震えていた。すべてが暗い色に染まり、灰色の影と形が重なり合ってひとつに溶け、区別がつかない。あたりには濃い薔薇の香りがたちこめ、藍色の夕闇の向こうに、塔のまわりを囲むように咲いている白っぽい花のシルエットが見えた。

塔の小さな扉に近づくにつれ、リリーの心臓はますます激しく打ち、全身が震えた。ためらいながら、彼女は古びた木の扉に手をかけた。

力をこめて押そうとしたとき、扉が向こうからぱつと開いた。戸口に人影が現れ、薄闇の中に白いシャツがぼうつと浮かび上がる。後ろに飛び退くより早く、男の手が伸びて彼女をつかまえ、引き寄せた。恐怖のあまりリリーは息が止まりそうになった。「トロイのヘレネ」その声はとても低く、とても険しかった。彼はリリーの身体を小さく揺すった。「あとをつけてきたのか？」

傲慢な言葉は、彼女をショックから呼び覚ました。「違うわ。鳩を捜しに来たのよ。怪我をした鳩を。さっき鳩が放されたとき、誰かが矢を放って鳩に刺さったの。それで捜しに来たら、この塔の屋上にいるのが見えたから。まさか、あなたがいるなんて——」トリスタン・ロメロがパーティーのさなかに、こんな人けのない場所にいるということは……。その理由に思い至り、彼女はあわててあとずさった。「ごめんなさい、もう行くわ」

リリーの腕をつかむ手に力がこもった。「せっかく鳩を助けに来たんだ。僕に遠慮

して諦めることはない」彼はもったいぶった口調で言葉を引き伸ばした。「たしかに、この屋上には鳩舎がある。捜してみるといい」

リリーはためらった。ポカホンタスに扮した女優のことを思い出す。「ここにいるのはあなただけなの？」

「そうだよ」白いシャツとは対照的に、顔がとても暗く見える。頬の下のかほみが濃い影になっているほか、細かい表情はいつさいわからない。けれども彼の声はひどくざらつき、笑ったときにも、ユーモアはひとかけらも感じられなかった。「僕に近づくなと、トムに忠告されたのか？」

彼はリリーの手首を握ったままだ。脈が速いリズムで彼の親指を打っているのがわかる。「私は、あなたの邪魔をしたくないと思っただけよ。鳩舎はどこ？」

トリスタンは手を離して後ろへ下がり、彼女を中へ促した。「階段のいちばん上だ」塔の空気はひんやりとして湿っていた。石の螺旋階段を裸足で上ると、氷のように冷たい。なかばまで上ったところで小さな踊り場に行きあたり、どこかから差しこむ薄明かりの中に閉じたドアがぼんやりと見えた。リリーが立ち止まると、トリスタン

は彼女を追い越し、先に階段を上りきった。

彼はドアを押し開くと、後ろに下がってリリーを先に通した。彼の前を通り、屋外に踏み出したリリーは、ゆっくりとあたりを見まわした。思わず感嘆の息がもれる。

外から見るとまるで廃墟のようで、石の壁も崩れかけて見えたのに、どうやらそれを見せかけのようだった。素足の下はなめらかな敷石で覆われ、外側から見ると荒れはてて見えた厚い石壁の内側には、鳥が巣を作れるように棚がしつらえてある。だがなによりも、リリーはそこから見える眺めに目を奪われた。遠く、ひと筋のピンク色を残した暗い空の下に、鏡のような湖が鈍く光り、湖畔を縁取る木立の影が広がっている。正面側では壁が一段高くなっているが、ゴシック様式のアーチ窓から、湖の向こうの城とその広大な庭までが外部から気づかれることなく一望のもとに見渡せた。リリーは思わず歩み寄った。

「驚いたわ……てっきり廃墟だと思ってたのに」

「それを意図して造られてるからな」トリスタンが戸口から答えた。「トムの先祖が造らせたらしい。ただのお飾りの塔と見せかけて、実は信じられないほどうまく設計

された賭博場というわけだ。君が今立っている場所が見張り台で、誰かが来たらずぐわかるようになってる」

リリーは首を振り、静かに笑った。それから、急にめまいと息苦しさを覚え、なめらかな紺色の空を振り仰いだ。

トリスタンが低いドア枠をくぐり、ゆっくりと近づいてくる。

リリーの脈は激しく打ち、顔から笑みが消えるのがわかった。霧もやの中で、険しい顔とダークブルーの瞳を見つめるうちに、彼女は言いようのない絶望感にとらわれた。

胸が締めつけられそうなほど美しいこの男性は、自由気ままなプレイボーイとしてパラッチを喜ばせる一方で、誰にも言えない悲しみを背負っているかのように見える。

「君の言うとおり——」

リリーは驚き、小さく息をのんだ。私の考えていることがわかるの？

トリスタンは近くの壁を示し、抑揚のない声で言った。「怪我をした鳩は、そこにいるよ」

「ああ……」リリーはその場にしゃがみこんだ。巣の奥の方に、さっきの鳩がうづく

まっっている。片方の翼が不自然に持ち上がり、付け根の部分が赤く染まっている。「かわいそうに、なんてことを……」

トリスタンは喉を締めつけられる思いがした。慈愛に満ちたその声は、彼の鉄壁の防御を突き抜け、疲れはてた心までまっすぐに届いた。

その鳩が自分のような気がした。

ふだんの彼はふたつの世界を抜け目なく行き来し、ひとたび両者を隔てる扉を閉じれば、それが勝手に開くことはない。

だが今夜は……なにかがもどかしい。トリスタンはちつと舌打ちをした。パーティーのお祭り騒ぎが神経に障り、ここへ避難してきたというのに、これではますます始末におえない。

「翼が折れてるみたい」リリーのやわらかい声がした。「どうすればいいのか……」

トリスタンはリリーから目をそらし、遠くにきらめくパーティー会場に目をやった。

「どうすることもできないだろう？」声が陰しくなるのが自分でもわかった。「さっさと楽にしてやった方がいい」

「だめよ！」彼女は即座に否定し、トリスタンが鳩をつかんで首をへし折ろうとでもしているかのように、鳩の前に立ちはだかった。「そんなこと……」

「どうして？」彼の脳裏に、カザキミールで目にした光景が光るストロボのようにフラッシュバックした。たかが鳥じゃないか。怪我をしたのは哀れだが、悲劇とはほど遠い。「苦痛から解放してやるのが、どうしていけないんだ？」

「だってそれは、神様が決めることだからよ」彼女は静かに答えた。「私たちの誰にも、そんなことを決める権利はないわ」

暮れゆく一日の、最後の光の中に立つ彼女には、なにかこの世のものとは思えない神秘的な美しさが漂っていた。

彼女に苦しみのなかがわかるといふんだ。神の権利だつて？ トリスタンは言つてやりたかった。神でなくても、決めなくちゃならないどうしようもないときがある。ほかにどうしようもないからやるのだ。権利なんて関係ない。

彼は唐突に体の向きを変え、戸口へ戻りかけた。「権利うんぬんの問題じゃない。苦痛から解放してやる勇気があるかどうか、それだけだよ」

「待って！」

トリスタンの耳に、追ってくる彼女の足音が聞こえた。彼は踊り場で立ち止まり、ドアにもたれて、彼女が下りてくるのを待った。

リリーは最後の数段をゆっくり下り、彼の前に立った。「私にはとても、あの鳩を殺すことなんてできないわ。どうすればいいの？」

トリスタンは肩をすくめた。「それなら、黙って無力を受け入れるしかない」  
「でも、それじゃあ——」

「そういうものだ」彼はにべもなく告げた。

そのとき二発の爆発音が夕闇を打ち砕き、トリスタンの脳裏に悪夢の光景が甦った。リリーもショックに目を見開き、弾かれたように窓を振り返った。トリスタンは考えるより先に彼女を抱き寄せ、肩でドアを押し開いて部屋に転がりこんだ。

次の瞬間、窓の外がぱつと明るくなり、きらめく星の雨が降った。

花火か。爆弾と迫撃砲ではなかった……。だがほっとしたのもつかのま、トリスタンは別の衝撃に襲われた。シルクのドレスに覆われたリリーの胸が強く押しつけられ

ている。二度目の爆発音が轟いたとき、彼女はぎこちなく笑って体を離した。

リリーは六角形の部屋を見まわした。淡い灰色の壁にアーチ窓があり、中央には彫り装飾のほどこされた支柱つきベッドが置かれている。

「ここは、あなたの部屋なの？」

トリスタンはかすかにうなずいた。長年にわたり、トムには相当の資金を融通してきた。この塔はいわばその見返りだ。「ひとりになりたいときに、ここへ来る」

ふたりの目が合い、突然時間が止まった。

リリーの唇は開かれ、呼吸は浅く、銀色の瞳の中では色鮮やかな花火が輝いている。

やがて彼女は目をしばたたき、顔をそむけた。「そうだったのね。ごめんさい、もう行くわ」

リリーが踵きびすを返すと、トリスタンは先まわりしてドアを閉め、そのドアに寄りかかった。

「今夜は、ひとりになりたくないんだ」

トリスタンの全身をアドレナリンが駆けめぐり、激しい鼓動は痛いほどだった。外では花火の音が轟き、地球の反対側に残してきたはずの記憶をまざまざと呼び覚ます。

薄明かりの中で見るリリーは、この世のものとは思えないほど美しかった。彼女はトリスタンをじっと見ている。その目の奥を見つめるうちに、彼のパニックは心もちやわらいだ。代わりに、生温かい欲望の波が押し寄せ、意識が麻痺してきた。指の間をこぼれ落ちる砂のように、理性がすり抜けていく。彼はそれにしがみつき、現実世界に踏みとどまろうとした。だがそのとき、リリーがそっと一歩踏み出し、彼の目の前に立った。やわらかそうなカーブを描く頬に、長いまつげが影を落としている。彼女の唇から震える吐息がもれ、ため息となって彼の肌をかすめた。

「私もひとりになりたくない……」リリーはそつと告げた。「でも、パーティに戻るのはいや」

トリスタンはゆっくりと手を伸ばし、彼女の細い肩に触れた。リリーの肌が、炎に触れたかのようにぴくりと反応する。と、彼の身体をすさまじい欲望が駆け抜けた。

リリーの香りを吸いこみながら、トリスタンはゆっくりと顔を近づけ、彼女の肩に唇を押し当てた。「パーティは嫌いなのか？」

「人が大勢いるところは苦手なの……」彼の唇が触れるのを感じ、リリーはそつと息をのんだ。「人に見られるのが、好きじゃなくて」

「職業を間違えたな」トリスタンは冷ややかに指摘した。

「わかってるわ」

声ににじんだ切ない痛みに気づき、トリスタンは顔を上げた。一瞬、リリーの顔に空虚な表情が浮かんだ。なぜだろうと思ったとき、彼女の開いた唇が目のおすぐ近くに迫り、質問はあえなく溶けてなくなった。

いずれにせよ、尋ねたかったわけじゃない。べつに彼女と話がしたいわけでもない。

これは純粹に、身体だけの問題だ。感情は関係ない。

リリーの手が伸び、トリスタンの頭をそつと抱き寄せた。ふたりの唇が重なる。彼女のドレスのストラップが肩から落ちそうになっているのがわかる。指をかけて引っぱれば、なめらかなシルクはするりと床に落ちるだろう。彼女も求めている——だがトリスタンははやる欲望を抑えた。焦るな。

僕はこのためにはやるやつてきたんだ。トムやマスコミのことは、都合のいい言い訳にすぎない。

これは救済の儀式だ。魂を清めるための炎の洗札だ。この行為の中でなら、僕は我を忘れ、目を閉じるたびにつきまとって離れない、あのおぞましい光景を消し去ることがができる。相手が誰かなんて関係ない。キスをするのが誰の唇だろうがかまわない。これは単なる手段にすぎないのだから。トリスタンは我を忘れてキスを深めた。生きていくという証を思い出すための、肉体の悦び……。

リリーは唇を離し、あえぐように息を吸った。欲望の波にのまれまいと、なんとか気持ちを落ち着けようとした。窓の外の夕闇と室内の壁がひとつに溶け、自分たちだ

けが現実から切り離されて、大海原を漂っているようだ。トリスタンはリリーの肩に両手をのせ、親指で彼女の顎を上向させた。

「最初に断っておくが、これは今夜限りだ。僕たちはつき合うわけじゃない。続きも約束もいっさいなし。ハッピーエンドもなし。それでもいいのか？」

あまりに正直な告白に、リリーはなんと言っているかわからなかった。約束もない代わりに、嘘もなし。心の奥のどこかにちくりとした痛みを感じたが、目のくらむような欲望が麻薬のようにそれを打ち消し、身体を走る快感と溶け合った。

明日の朝には、私はまったく別の世界の、新たな人生へ旅立つ。遠いアフリカへ。だから今夜は特別。過去と未来の間に、ぼっかり浮いた時間。私を縛るルールはなく、今この瞬間の、こみ上げる思いだけ。明日のことは忘れて、今はただ思い出が欲しい。「わかったわ」彼女はささやき、トリスタンの開いた襟の中に手をすべらせた。「今夜だけ」

花火の音が再び轟き、窓の外にピンクの星が飛び散った。トリスタンの身体に、かすかに力がこもった。リリーはこみ上げる欲望を抑え、震える指で、用心深く彼のシ

ヤツのボタンをはずした。あらわになった肌を彼女が指の背でそつとなぞる間も、彼は身動きもせず立っていた。

リリーは手を下へ滑らせ、彼のベルトのバックルに触れた。

一瞬、トリスタンは痛みを耐えるように上を向いたが、なにかを振り切ったかのようにリリーの肩をつかんだ。

神秘的な青い薄闇の中、白いベッドが月のようにひんやりと浮かび上がって見える。トリスタンの両手が腕を撫で下ろし、リリーは身を震わせた。彼が力強く引き寄せる。リリーはもはや、自分が立っているのか、宙に浮いているのかもわからなかった。

トリスタンがそつとドレスのストラップを下ろし、あらわになった肩に至福の円を描く。リリーのまぶたの裏には、宵の空に光る星よりも明るく金色の光が輝いていた。「へレネ……」トリスタンがささやき、リリーは弾かれたように目を開けた。

「違うわ。リリーよ」彼女が美しい唇をとがらせているのを見て、トリスタンは静かに笑った。リリーの不安そうな表情に胸を打たれた。その名前を忘れるはずがない。「わかってるよ」彼はリリーの喉元に唇を押し当て、ゆっくりと下へ這わせた。「さ

つきの君は黄金に輝くデメテルのようだったが、今は月の女神のセレネを思わせる」  
リリーは再び目を閉じ、はにかんだ表情で彼の髪に顔をうずめた。「それは、どんな神様なの？」

「彼女は人間に恋をした。エンデュミオンという名の、ハンサムな羊飼いの少年にね。いずれ彼の死によって別れなければならぬことを思うと、彼女はとても耐えられなかった」トリスタンの温かい吐息が、彼女の胸を滑るように撫でる。「そこでゼウスに頼みこんで、エンデュミオンに永遠の眠りを与えてもらったんだ。おかげで彼は、死ぬことも、歳をとることもなくなった。そしてセレネは毎晩、彼のもとを訪れ、隣に横たわった」

トリスタンは背中を起こし、リリーを見つめた。彼女の目は欲望のせいで輝きをおびているが、その奥にはかすかな笑みも見える。

彼女は爪先立ちになり、再び唇を重ねた。

「ずいぶん女神に詳しいのね」リリーはそっとささやいた。「天上界にお友達がいるのかしら。それとも、古典を専攻したの？」

彼は急に顔を離した。「どちらもはずれだよ。古典の学位も半分しか持ってない」  
「途中でやめたの？」

「そう、ドロップアウトした」穏やかな口調だが、苦みは隠せない。トリスタンはリーに唇を押し当て、自分が送るはずだったもうひとつの人生を頭の中から締め出した。彼が薔薇色の乳首に舌尖を這わせ、リーは息をのんだ。彼女が小刻みに震え出すのを感じながら、トリスタンはそれをさらにたっぷりと味わい、キスに溺れた。この数日間のおぞましい出来事と絶え間ない恐怖がすっと消えていくのがわかる。欲望と忘却の巨大な渦が彼をのみこんだ。それはまるで、生き残るためのメカニズムが自動的に動き出して、思考や計画や自制といったしがらみから、ようやく彼を解放してくれたかのようにだった。

リーがまるでそれを察したかのように、月の光が降り注ぐベッドにトリスタンをそっと押し倒し、上になった。月明かりの中で、彼女の肌はこの世のものとは思えないほど白く、なめらかだった。黒く輝く瞳と赤く熟れた唇が、ますますくつきりと浮かび上がって見える。彼女はトリスタンの脚の間を下へと滑り、濡れた唇を開くと、

目を伏せた。

世界が遠のき、マシンガンを思い出させる花火の音さえ、今は鈍いぱちぱちという音にしか聞こえない。熱いペニスを包みこむ彼女のやわらかな唇と潤った舌、肌をくすぐる軽やかな髪感触以外にも感じられない。目を開いて見下ろすと、白い背中が逆さに見えた。めまいがするような快樂の中で、彼女の肩甲骨は天使の翼のようだ。なんてことだ……。もう限界だ。

トリスタンは身体を起こして座り直し、リリーの髪に指を差し入れた。

「僕の番だ」

薄闇の中で彼と目が合い、リリーの身体に熱が広がる。彼の表情は硬く張りつめているが、暗い情熱はありありとその目に映っていた。リリーは黙って従い、月明かりに照らし出されたベッドで彼と向き合った。トリスタンの指が彼女の髪にもぐり、頭をゆっくりと撫で始めた。熱い波が体中に広がっていく。そのようなすを、彼はじっと眺めている。

ただ、じつと……。

リリーは、人に見られることには慣れていた。それは彼女の仕事であり、生活そのものだ。見られて腹が立つこともあれば、うんざりすることも、不愉快になることもある。でも、こんな感覚は初めてだった。体が内側から燃え出すような……。脚の間から全身に炎が広がる一方で、欲望の蜜に溺れてしまいそう。これまで、リリーにとって身体は単なる仕事の道具にすぎなかった。名目上、自分が所有者であるというだけの、一体感を感じられない身体。だが今、目の前の男性によって、リリーの身体にはたしかに命が吹きこまれつつあった。もうただ美しいだけの皮と骨ではなく、熱くうづく血と悦びが、彼女の身体をすみずみまで満たしていた。

トリスタンの指がへその下あたりで気だるげに円を描いている。リリーの肌は期待に粟立った。撫でていた手が止まり、手のひらがそっと押し当てられた。その行為は、なんとも言えず親密な感じで、リリーはただ身を任せた。

しばらくの間、ふたりは身動きひとつしなかった。トリスタンの手から、ぬくもりがじんわりと広がっていく。激しい欲望とは裏腹に、抑えられていた心の叫びがようやく聞き届けられたかのような、不思議な安らぎさえ感じる。

「なんだか、彼に大切にされていると思っ  
てしまっ  
そう  
だ。」

寄せては返す波のような欲望に再び襲  
われたとき、リリーは誘うように頭をの  
けぞ  
らせ、腰を浮かせた。トリスタンの指が、  
脚の間の熱い泉に浸される。たしかな、  
だ  
が決して急せくことのない動きでなぞられ、  
撫でられ、身体が彼に向かって開かれて  
い  
くのを感じる。容赦ない指に耐えられな  
くなり、腰が切望を伝えるようにびくび  
くと  
動き、震えた。

ささやきのように軽く、トリスタンの  
指が熱くふくらんだクリトリスをかすめ、  
反  
射的に激しく震えたリリーの身体を、彼  
はしっかりと抱き締めた。

「お願い、トリスタン」リリーは懇願  
した。「わたし……もう待てない……」

リリーの両手は、言うことをきかない  
自分の身体を支えるように、トリスタンの  
肩  
にしっかりとつかまっていた。それでも  
しないと、滑り落ちてばらばらになって  
しま  
いそうだった。

「トリスタンはかすかに首を振った。  
「僕もだ」

そしてトリスタンがリリーの身体に熱く  
硬いペニスをうずめたとき、リリーはもう

少しで歓喜の声をあげるところだった。全身が張りつめ、恍惚に打ち震えた。強烈な欲望の中で思考が麻痺し、なにも考えることができない。ただ感じるだけ。細胞という細胞が悦びに満ちあふれ、とても背中を起こしていられない。だがトリスタンの腕が彼女をしっかりと抱いていた。彼はリリーの背中をひんやりしたシーツにそっと横たえ、豊かな胸に、首筋に、開いた唇にキスをした。絡み合うふたりのリズムが加速し、リリーは彼の腰に脚を巻きつけて必死にしがみついた。

リリーの最後の声が、高く夜の闇に響いた。ちようどそのとき、フィナーレを迎えた花火が湖上で大きく爆発した。ふたりは共に荒い息をつきながらぐったりと横たわり、汗が乾いていくのを感じた。

頭上に広がる無限の濃紺の中で、ピンクの星と金色の星がぐるぐるとまわっていた。

夜の間、雨が降った。

リリーは寝乱れたベッドを抜け出して窓辺に立ち、ひんやりした銀色と緑の世界を眺めた。細かい雨が降り、草に覆われた湖面に霧がたちこめている。

腕を広げて寝ているトリスタンのもとへ戻ったとき、月明かりに照らされた彼の顔にリリーは息をのんだ。眉間には深いしわが寄り、唇は苦しげに歪んでいる。

彼女が見つめる前で、トリスタンは大声で叫んだ。憎しみと痛みに満ちた、荒々しい怒りの声だった。リリーは思わず駆け寄り、彼の頭を抱いて、そつと髪を撫でた。彼の額に唇を寄せ、とりとめもなく慰めの言葉をささやく。やがて夜明けを告げる灰色の光が部屋に広がり、リリーは彼の体から力が抜けていくのを感じた。

トリスタンの寝顔に安らかな表情が戻ったとき、リリーは静かにベッドを抜け出すと、ドアを通り抜け、階段を下りた。

トリスタンはヒースロー空港のことを思い出させてはくれなかった。彼は眠ったまま、別れの言葉もなかった。けれど、別れの言葉など言えるはずもないことをリリーは知っていた。心も身体も、もはやトリスタンから離れられないことはたしかだった。でも私はこれからアフリカへ旅立つ。この塔から立ち去ることができるなら、これから待ち受けているどんな現実にも、立ち向かうことができるはず。

彼のもとを去ることができるなら、なんだってできるはずよ。

二カ月後、ロンドン

「おめでとうございます、ミス・アレクサンダー」

にこにこ顔で言われ、リリーはわけがわからずに医師の顔を見つめた。病院へ来たのは、一カ月前のアフリカ行きでおなかをこわして以来ずっと体調がすぐれなかったためだ。それなのにドクター・リリーは、彼女がたちの悪い熱帯の病気ではなく、宝くじに当たったとでも言わんばかりだ。

リリーは顔をしかめた。「検査の結果が出たんですか？」

「そのとおり。これで断言できます。あなたはマラリアでもないし、黄熱病でも肝炎

でもありません」医師はそう言いながら、薄い黄色の紙を一枚一枚、デスクに置いていった。「腸チフスも、狂犬病も、ジフテリアも心配ありません」

リリーの心は沈んだ。

熱帯病になりたいわけではないが、少なくとも、だらだらと続く倦怠感や口の中の不快な金属味の原因がわかれば、薬をのむとか、なんらかの手を打てるはずだ。そうすれば、体がほてり、息苦しくて眠れぬ夜を過ごすこともなくなるだろうし、トリスタンと過ごしたあの夜のことを考えまいと躍起になる必要もなくなるのに。

リリーは首を振り、今この場のことに意識を集中させようと努めた。それもまた最近ではかなり難しい。彼女の意識はすぐに同じところへふわふわと漂っていき、よほどの努力をしないと現実には引き戻せない。夕闇に包まれた塔と、月明かりに照らされたベッド……。

あれはもう過去のこと。忘れなくては。

「すみません、よくわからないんですが、検査の結果がすべて陰性なら、いったい

――

「いやいや、すべてが陰性だったわけではありません。はっきり陽性を示したものもありますよ」ドクター・リーはデスクの上で両手を組み、輝くような笑みを浮かべた。「あなたは妊娠しています、ミス・アレクサンダー。おめでとうございます」

リリーは、四方の壁が一気に迫ってくるような錯覚に陥った。明るい九月の日差しが突如遮断され、優雅な診察室の空気が固まってしまったかのように息ができない。顔からすっと血の気が引き、頭に不協和音が鳴り響いた。しばらくして、遠くからドクター・リーの声が聞こえてきた。

「そう、そうやって、しばらく頭を下にして……。とくに珍しいことではありません。ホルモンの影響で、心配には及びませんよ。少し待てばよくなります」

頭の中に広がる闇に、夜明けの光と霧に包まれた湖の風景が甦った。

灰色がかかった真珠色の景色の中で、銀色に輝く霧のような雨が降っていた。その音楽のような響きをリリーは思い出した。トリスタンを腕に抱いて髪を撫でている間、雨の音ははるかな時を超えた子守歌となって、彼女の心を慰めてくれた。

その間もずっと、誰にも知られず、誰にも見えないところで、この密やかな奇跡が

育まれていたなんて……。

「どうです？ 少しよくなりましたか？」

リリーは背中を起こして座り直し、深呼吸をした。「ええ、すみません。シヨックだったので……」

医師の顔には、同情と気遣いがにじんでいる。「予定外でしたか？」

「え、ええ」リリーは口ごもった。「どうしてかしら。ピルはのんでたのに……」

「まあ、避妊薬はよくできた薬ですが、百パーセントあてになるものじゃありませんからね。アフリカでおなかをこわしたせいで、ピルの効果が妨げられたのかもしれない。もし時間がそれほどたっていないのなら……」医師は巧みに言葉を濁した。

リリーは黙ってうなずいた。

「そうすると、まだきわめて初期の段階ということになりますね」医師は優しく告げた。「選択肢はありますから」

ぎこちなく立ち上がったところで、リリーは医師の口にした言葉の意味に気づき、椅子の背につかまった。

選択肢。

「考えておいてください」医師らしい、感情を交えない口調だった。「パートナーの方ともよく話し合って、決まったら教えてください」

リリーは首を振った。「パートナーはいないんです。彼は……違うんです……」言葉が続かなかった。自分が安っぽい娼婦のように思えた。私はトリスタン・ロメロのことをなにも知らない。電話番号もなにも……。しかも彼は、はっきりと宣言した。これは一夜限り。続きも約束も、いっさいなし、と。

ああ、なんてこと。実際、私は安っぽい娼婦と同じなのかもしれない。リリーは、月明かりを浴びたベッドで飢えたように彼を押し倒し、唇で愛撫したことを思い出した。もう待てない、と懇願したことも。

「彼は、このことには関係ありません」リリーは椅子の背を握る手に力をこめた。「彼のせいではないし、彼の責任でもありません」

ドクター・リーの眉が上がった。「ミス・アレクサンダー……」

「私のせいなんです。私の責任だわ。この子は、私の子です」その言葉を口にするの

は、不慣れで奇妙な感じがしたが、同時に、あの晩トリスタンの腕の中で感じたのと同じ、不思議な安らぎももたらした。リリーは、細かな流星のシャワーを浴びたような気がした。彼女は背筋を伸ばすと、決意のこもった笑みを浮かべて言った。

「私、この子を産みます」

「お電話です、セニョール・ロメロ」

トリスタンは、苛立たしげにコンピューターの画面から顔を上げた。「邪魔をするなど言っただろう」

「申し訳ありません。ですが、セニョール・モンタギューからです。お話をなさりたいんじゃないませんか？」

トリスタンはうなずき、電話に手を伸ばした。「そうだな、ありがとう」彼は椅子を半回転させ、窓の外のサン・ハウメ広場と、日差しの降り注ぐ市役所に目を向けた。ロメロ銀行は、スペインで最も由緒ある銀行だった。その本店はバルセロナ中心部の一等地にあり、美しい建物だが、重苦しさは否めない。高い天井と足音の響く大理

石の床に挟まれた部屋は、昼以降は暗い影に覆われる。

「トムか？」

「やつとだ。君をつかまえるのは並大抵のことじゃないな」不平をこぼしつつも、トムの口調には人のよさがにじみ出ている。「受付嬢でも誘惑しているのか？ 君の秘書は、僕が君と話をするのを相当いやがってたぞ」

「ゴシップ記事を真に受けるなよ」トリストタンは冷ややかに言った。「こっちは仕事をしてるんだ。信じないかもしれないが、銀行はほうっておけばうまくいくという代物じゃない。ビアンカには電話も面会もすべて断るように指示してあったのに、よく説得できたな」

「それが愛想つてもものだ。君のようにまなざしひとつで女性をベッドに誘えない男は、愛想のよさに頼るしかないからね。それでビアンカというのは、あの胸の谷間がすばらしい黒髪の子か？」

トリストタンは思わず苦笑した。「いや、赤毛のほうだ。ソフィア・ローレンに似ているほう。だが、もうじき結婚する男に、そんなこと関係ないだろう？ 未来の花嫁

の「ごきげんは？」

「そりゃもう、相変わらず美しくてセクシーだよ。今はフラワー・アレンジメントと花嫁付添人のドレス選びに夢中みたいだ。まったく、世界が一変したね。ときどき、君の一夜限りのつきあいというのもあながち悪くないんじゃないかと思えてくる」

「やっと気づいたか。気が変わったのなら、まだ間に合うぞ」

トムは笑った。「いや、もうとつくに手遅れだ。事態はすでに僕の手を離れ、僕はスカレットと母の言いなりだよ。母はどうしても婚約パーティをすと言って譲らないし、申し訳ないが、君にも花嫁付添人を頼まなくちゃならない。電話したのもそのためなんだが、九月の最終土曜日はなんとかなりそうか訊きたかったんだ。スカレットは、ストーウエル城でささやかに食事をするぐらいが彼女の家族も身構えなくていいだろうと言うんだが……」

トリスタンは手元の携帯電話のスケジュールに目をやった。マドリードとリスボンでパーティ。ミラノでビジネス・ディナー。週末は、友人の離れ小島の別荘に招待されている。「だめだと言ったらっ？」

「それなら、十月にするよ」トムはいっこうにかまわれないという口調で答えた。

トリスタンは椅子の背にもたれ、片手で髪をかき上げた。どうやら簡単には逃げられそうにない。どうして逃げたいのか、理由は考えたくないが。

「調整してみるよ」彼はぞんざいに答えた。「あるプロジェクトが微妙な段階にあって、約束はできないけどね」

「ああ、わかってるよ。君がいつだって約束なんかできないことは」遠く離れた電話の向こうで答えるトムの声には、静かな諦めがにじんでいた。「約束をしないことと、自分を何事にも縛らないこと。そのふたつにかけては、この世で君の右に出るやつはいない。まあとにかくスケジュールに印をつけて、それより重要な用ができない限り来てくれよ」

「また電話する」トリスタンは無愛想に告げて電話を切り、一瞬、手の中の受話器を見つめた。頭の中で、トムの言葉が非難するようにこだました。

一語一句、そのとおりだ。

トリスタンは舌打ちをして、デスクに拳を突いた。ロメロ家の人間は、代々このデ

スクに向かい、銀行という名の帝国を動かしてきた。一族の名を世界に知らしめ、富と権力を確保するためには、誰が破滅しようとかまわなかった。それと同じ冷酷な血が、僕にも流れているのだ。贖罪のためになにをしようと、トリスタンは決してそのことを忘れなかったし、疑わなかった。僕の血には、代々受け継がれてきた罪と腐敗がたつぷりと染みこんでいる。

唯一の違いは、それを認めるだけの正直さが僕には残っているということだが、一族の罪がそれであがなえるようなものではないことも、わかっている。

トリスタンは皮肉をこめて、なぜやりに笑った。いいだろう。それだけ正直なら、トムの婚約パーティーに出席したくない本当の理由も認めよう。

要するに、彼女も来るからだ。リリー・アレクサンダー。

アーモンドの香りのする、ベルベットのようになめらかな肌をした女。

僕の隙を突いて、心の中まで入りこんできた女。そんなことは初めてだった。

そう、二度とあんなふうにはさせない。トリスタンは心を鬼にした。彼女が来ようが来るまいが、これまでと同じやり方でいけばいい。

礼儀正しく、距離を保つ。そして立ち去る。

リリーは落ち着きなく薔薇色のドレスを握り締めた。「婚約を祝うささやかなデーナーパーティと言っていたはずよ」彼女はスカレットにささやいた。「それなのに、こんな……」

彼女は不安げな表情で、ストーウエル城の大広間を見渡した。両側に大きく開いた扉から、イブニングドレスに身を包んだ人々が絶え間なく入ってきて、盛んにキスの挨拶を交わしている。

スカレットは笑って、リリーの腕に腕を絡めた。「たしかに、とんでもない世界よね。本当にささやかなパーティにする予定だったの。でも結局、誰ひとり削りたくなくて、友人知人をかたっぱしから呼ぶはめになっちゃったのよ」

リリーは顔から血の気が引いていくような気がした。

「全員？ トムの友達も？」

「もちろんよ。私よりひどいわ。かつての学友全員と、親族一同」スカレットは声

を落とす。「うちの親なんて、かわいいそうに、すっかりおろおろしちゃって。できればいっしょにいてあげてくれないかしら」

リリーは黙ってうなずいた。大きな塊が胸につかえ、一瞬、言葉が出なかった。

「もちろんよ。私も久しぶりに会いたいわ」

それは嘘ではなかった。スカーレットの両親は、家庭らしい食事や宿題、ボーイフレンドに関する助言まで、リリーの母親には望めなかったあらゆるものを与えてくれた。トマス夫妻が今の私の状況を知ったら、なんて言うかしら。スカーレットに腕を握られるのを感じながら、リリーは想像せずにはいられなかった。

「会いたかったわ」ふいに、スカーレットが言った。「どんなに会いたかったか、きつとあなたにはわからないわ」胸元で輝くダイヤモンドと洗練されたヘアスタイルにもかかわらず、彼女は急に、ひどく不安そうな顔になった。「結婚しても、私たちの仲は変わらないわよね？ これからもずっと親友で、お互いなんでも話せるわよね？」

リリーは喉元に引っかけた罪悪感をのみ下した。「もちろんよ」

スカレットは近くにいたウエイターのトレイからシャンパンの入ったグラスをふたつ取り、ひとつをリリーに渡して、グラスの縁をカチンと鳴らした。「私たちの変わらない友情に」

シャンパンの刺激的な甘い香りを吸い込んだとたん、リリーの胃が吐き気をもよおし、アルコールの受け入れを拒絶した。額に汗がにじんで、喉が小刻みに震えているのがわかる。

「リリー、大丈夫？ どうしたの？」

リリーは黙って首を振った。スカレットの心配そうな顔がぼやけて見える。心苦しくてならなかった。彼女とは十歳の頃からの親友で、隠し事をするのはこれが初めてだ。だからといって、妊娠のことなど話せるわけがない。あの晩のことさえ話していないのに。

あまりにも多くのことが、いつぺんに起こって……。スカレットにトリスタンのことを話さなかったのは、単に機会がなかったからだ。仮装パーティーの翌日にはそのままアフリカへ向かった。リリーが戻ったとき、スカレットは目を輝かせて、花火

の最中にトムにプロポーズされたと打ち明けた。

同じときに自分のしていたことを話すのは、なにか無粋な感じがした。

「さつきから、顔色がよくないと思っていたのよ」スカーレットはリリーの肩を抱き、広間のドアに向かって歩き出した。「というより、アフリカから戻って以来ずっと。病院へ行つて、ちゃんと検査を受けた方がいいわ」

「受けたわ」リリーは力なく答えた。玄関ホールを目指して広い石の階段を下りていくと、開いたドアからひんやりした空気が流れてきて、心もち吐き気がやわらいだ。リリーは心を決めた。これ以上黙っているわけにはいかない。彼女は最後の段で立ち止まり、手すりにもたれて玄関を見やった。冷たい九月の風に、髪がなびいた。

スカーレットが心配そうに振り返った。「それで、なんて言われたの？」

「なんでもないと言われたわ。その……病気じゃないって」リリーは言葉につまった。スカーレットの目を見ることができない。親友の背後に視線を据え、彼女はおずおずと続けた。「つまり——」

リリーは口を開けたまま、ぴたりと止まった。赤い壁が大きくうねり、アーチ型の

天井がリリーめがけて迫ってくる。夕闇の中から、彼が玄関に現れた。一瞬、気のせいかと思った。生まれ持った優雅さをまとう美しく無表情なその人は、砂漠で迷った旅人が見る緑のオアシスのように、幻にすぎないのだと。だが彼がふと顔を上げると、リリーはたちまちその青い瞳に引きずりこまれた。

いいえ、幻なんかじゃないわ。

スカレットがげんそうにリリーの視線の先を振り返った。「あら、トリスタンが来たのね。トムが喜ぶわ」彼女はつぶやき、リリーに注意を戻した。「それで、病院ではなんて言われたの？ 働きすぎ、とか？」

「いいの、気にしないで」口の中がからからに乾いて、ささやくような声になった。トリスタンは片手をパンツのポケットに入れ、こちらに近づいてくる。優雅なくつろいだ態度が、完全なる自信を物語っている。それにひきかえ、リリーはじわじわとシユレッターにかけられていくような気分だった。このままどこかに消えてしまいたいと本気で願った。

「おめでとう、スカレット」トリスタンは無愛想に言い、体をかがめて彼女の両頬

にキスをした。「今夜の君は光り輝いてるよ。トムは実に幸運な男だな」

この二カ月間、リリーはトリスタン・ロメロを本物より美化して記憶しているのだ  
と思いこもうとした。眠れぬ夜に彼のことを考えていると、月光に照らし出された記  
憶の中の彼の姿が、月の女神セレネとエンデュミオンの物語と重なってまるで神話の  
ように幻想的に思い出され、どこまでが現実でどこからが空想なのか、自分でも区別  
がつかなくなる。

だがなにひとつ記憶違いなどではなかった。天使の彫像を思わせる美しい顔に、リ  
リーは改めてショックを受けた。彼女は石の手すりにもたれ、恐れと期待を胸に、ト  
リスタンが彼女と視線を合わせる瞬間を待った。

こんなにどきどきしていたら、ひと目で秘密がばれてしまう……。

「トリスタン！」

階段の上でトムの声がし、リリーはほっとした。トムはにやりと笑い、靴音を響か  
せて階段を下りてきた。

「家に入るやいなや僕のフィアンセにキスをしてるとは。まったく、少しは結婚って

ものに敬意を示したらどうなんだ？」

トリストアンは優雅に肩をすくめ、両手を上げてみせた。「だから、いつも言ってるだろう？ たかが一枚の紙切れで、女性を引き留めておくのは無理だと」

「本人が引き留められたい場合は別よ」

スカレットが切り返すと、トムは彼女の肩に腕をまわし、頬にキスをした。

「申し訳ないが、階上には僕の親族が五百人ほど待ちかまえていて、花嫁に会わせろとうるさいんだ」トムはスカレットを連れて、階段を上り始めた。

トリストアンとふたりきりで残されてしまう。リリーはパニックに陥った。

「じゃあ、またあとで。君たちはたしかこの間の仮装パーティーで会っただろう？」

リリーの鼓動が激しく打ち始めた。きっとトリストアンにも聞こえているに違いない。顔が熱くほてるのを感じながら、彼女は意を決して顔を上げると、彼の顔を見つめた。

彼はおなかの子の父親。

だがトリストアンの態度はよそよそしく、声もひどく冷たかった。

「そうだったかな」

## 5

世の中には、他人にわざと不愉快な思いをさせたがる人間がいる。

トリストアン自身は決してそういう人間ではないが、女性関係に限っては、冷たくした方が相手のためなのだと信じていた。リリー・アレクサンダーに対しても、あの暑い真夏の夜の続きを期待させるつもりはないし、あのとときの記憶がその後いかに彼を悩ませたかについても、話すつもりはない。

だが彼女の銀色の瞳が曇るさまを目にした瞬間、トリスタンの胸には、ふだん馴染みのない罪悪感がこみ上げた。怒りや平手打ちなら予想していた。それは当然のことだし、これまで多くの女性からそのような報いを受けてきた。だが、静かな品位を感じさせるリリー・アレクサンダーのたたずまいは、彼の落ち着きを奪った。

「ええ、会ったわ」リリーは小さな声で、ほとんど申し訳なさそうに言った。「そのとき私は鳩を捜して——」

トリスタンの意識はたちまち夕闇に包まれた塔に引き戻された。彼女の優しいささやきと、慈愛に満ちたまなざし。それを目にしたときの、彼自身の反応も思い出した。やられたな。

「そうだった」彼はしかたなく、少しだけ笑みを浮かべた。「セレネ——君は鳩を捜していた女神だ」

彼女がはっと顔を上げ、彼を見た。

その目に映ったささやかな希望に気づき、トリスタンは自分を呪った。感情を挟まないこと。個人的な事情に立ち入らないこと。一度きりにすること。女性と関係を持つときの鉄則だ。あのとき最初のルールを破ったがために、その後どれだけ苦慮したことか。当然ながら、残りのルールまで破るつもりはない。

彼は顔をそむけた。

「ええ」彼女はささやくように答えた。「あの鳩は、どうなったのかしら」

トリスタンはためらった。あの翌朝、鳩舎に上がってみると、傷ついた鳩の姿はどこにもなかった。おそらく夜の間に鷹にでもやられたのだろう。だがいくら彼でも、それをそのまま話すほど無神経ではなかった。

「たぶん、よくなって飛んでいったんだろう」彼は答え、階段に向かいかけた。「いずれにせよ、また会えてよかったよ。それじゃあ、僕は……」

トリスタンが視線を合わせたその一瞬、ふたりの間に言葉にならないいくつものイメージが甦った。リリーは顔がかつと熱くなり、胸が締めつけられた。

つわりの影響か、吐き気の渦にのまれそうだった。手すりを求めて宙に手を伸ばし、彼女は膝からくずおれるのを感じた。手すりをつかむより先に、光が視界から消えていく――。

さっとトリスタンに支えられるのを感じながら、リリーは屈辱を噛み締めた。あれだけはっきり拒絶されながら、こんな醜態をさらすなんて。でも今この状態で無理に拒んだりしたら、本当に吐いてしまうかもしれない。トリスタン・ロメロのしみひとつないジャケットを汚すことを考えると、諦めておとなしくするよりしかたなかった。

彼に軽々と運ばれていると、リリーとスカレットがまだ少女の頃、小柄でかわいらしい女の子に憧れていたことを思い出す。冷たい空気が顔に触れ、肺に酸素が戻ってきた。リリーは勇気を奮い起こして、目を開いた。

ふたりは庭にいて、城の壁に沿って進んでいた。たった数センチのところにトリスタンの険しい顎がある。顎の割れ目も、美しく整った唇も、すべてくつきりと見える。リリーは思わず息をのんだ。こうして彼の香りを吸いこむだけで、切なさのあまり、またもや気を失ってしまいそうになる。彼の手から逃れようと、リリーは腕に力をこめた。

「もう大丈夫よ。ごめんなさい……下ろして」

「まだだめだ」

低い声でぞんざいに言われ、リリーの胸にさっきの屈辱と絶望が甦った。

彼との再会を、頭の中で何度も何度も思い描いた。感情は見せず、冷静に事実だけを伝え、あなたにはなにも要求しないと告げる。それだけ。謝罪はいらぬし、ましてや結婚を迫るつもりなどまったくくない。

そして、気を失うつもりも。

彼は建物の角を曲がり、半円状に広がる庭に出た。壁のくぼみに置かれた鉄製のベンチにリリーを下ろし、まるで覆いかぶさるように後ろに立った。

リリーは顔を上げる気になれなかった。顔に出さずに彼を見る自信がなかった。すぐ先に黒い湖が広がり、中央には塔がそびえているのが見えるが、リリーは、そちらに目を向ける気にもなれなかった。

「気分はよくなったか？」

「ええ、ごめんなさい」リリーはベンチに座っていることに感謝した。避けられない瞬間が間近に迫っているのを感じ、身体が震える。リリーは唇を噛んだ。「でも、かえってよかったかもしれない」

「というと？」ぞっとするほど冷たい声だ。

「あなたと話したかったから。その……ふたりだけで」

トリストランの表情が陰しくなった。彼は息を吐いて、横を向いた。「僕はきちんと説明したはずだ。あの夜のことは——」

「わかってるわ」リリーは静かに、けれどもきっぱりと言った。「でも、あなたにも知る権利があると思って。私、妊娠したの」

トリストアンは動かなかった。それから彼女に背を向け一、二歩進み、両手をパンツのポケットに入れた。

ごめんなさい。その言葉が喉元まで出かかったが、リリーは口にするまいと思った。後悔なんてしてない。それどころか、うれしいと感じてるもの。

彼女自身は、まだ年若い母親に行き当たりばつたりの育てられ方をした。そのせいか、リリーは子供の頃から誰かの世話をしたり、動物の面倒を見たりすることが好きだった。人形にはいつもきちんとパジャマを着せ、愛情をこめて靴箱のベッドに寝かすつけたし、おやすみの本も読んで聞かせた。

私の中には、誰かを愛したいという強い思いが、ずっと眠っていた。

私はこの子が欲しい。これまで望んだなによりも、この子が欲しい。

トリストアンがゆっくりと振り返った。暗く、寒々とした、人を寄せつけない表情だ。

「おめでとう。君も、その子の父親も」

「なんですって？」思いも寄らない言葉に、リリーは驚いて立ち上がった。「わからないの？ 私は——」

トリスタンは再び顔をそむけ、庭の方を向いたまま、彼女の抗議をさえぎった。「警告しておくが、それを口にする前に、慎重に考えることだ」その声は静かだが、喉元にナイフを突きつけられたように冷たく、鋭かった。

「脅しても無駄よ」

意外にも、トリスタンは笑い出した。絶望の響きをおびた、虚ろな笑い声だ。「わかってないな。僕は脅してるんじゃない。君を助けようとしてるんだよ。チャンスを与えようとね。なぜなら——」

彼はふいに言葉を止め、片手で髪をかき上げると、リリーの横に力なく腰を下ろした。彼はしばらく自分の手に視線を落としていたが、やがて目を上げ、彼女を見つめた。その死人のような表情に、リリーの背筋がぞつとするほど冷たくなった。

「なぜなら、僕が子供の父親だと君が口に出して言ったが最後、君はすべてを失うことになる」

リリーは膝の上に置いた手の指と指をぎゅっと絡ませ、せわしなく組み替えた。パニックにあおられて、言葉が勝手に飛び出した。「あなたにはなにも求めないわ。お金が欲しいわけでも、責任をとってほしいわけでもない。ピルはちゃんとのんできたのに、アフリカで体調を崩して……。だから、自分のせいだってわかっているわ。私はただ、赤ちゃんはあなたの子だって、あなたにも知らせるべきだと思ったのよ」

「ほかに知ってる人間は？」

「まだ誰も……」暖かい夕べにもかかわらず、リリーは激しく震えていた。「スカレットにも話してないわ。でも、これ以上は隠してられないし……」

「産むつもりなのか？」

「もちろんよ！」残酷な質問をあっさり口にされ、暗い胸の中に怒りの火花が散った。「もちろん私は産むわ！」

それでも彼の落ち着き払った態度は変わらなかった。「出生証明書に僕の名前を書くつもりか？」

「そうよ！ この子を、身元のわからない、名前のない子にするつもりはないもの」

「そうか」トリスタンはベンチに背をあずけ、上を向いて深く息を吸いこんだ。それから彼は、改めてリリーに向き直った。値踏みするような、冷たい目をしている。

「いくら出せば、考え直す？ 一度しか訊かない。じっくり考えてから答えてくれ」

「私を買収する気？」リリーは息をのんだ。笑いとともに、なにか暴力的な感情がむくむくとこみ上げる。「我が子と関わり合いにならないために、私を買収するの？

なんて冷たい人なの。絶対にお断りよ！」

彼はリリーを見据えたまま、目を細くした。「本当に？ その方が君のためでも？」

リリーは頑として首を横に振った。冷えきった身体の内にも、熱い怒りが湧いてくる。

「私のことなんてどうでもいい。私はこの子に、自分が何者なのか、出自をはっきりさせてあげたい。自分のルーツを知ってほしい」

それは、私にはずっとかなわなかったものだから。

トリスタンは立ち上がった。広い肩にさえぎられて、夕方の空が暗く陰った。リリーはハイヒールを脱いでベンチに足を上げ、おなかの中の頼りない命を守ろうとするように、膝を抱き寄せた。

トリスタンは背を向け、庭の向こうの暗い塔を眺めている。「そういうことなら、もうひとつの選択肢を受け入れる覚悟ができてるのか？」

「もうひとつの選択肢？」彼の口調はリリーの不安を誘った。「どういうこと？」

トリスタンは振り返った。「つまり、すべてかゼロかだ。僕に父親を名乗れと言うなら——」低く声を落とし、リリーの目を冷たく見据える。「結婚してもらおう」

「結婚？」

張りつめた細い糸がぶつりと切れ、リリーはすつと落ちていくような錯覚にとらわれた。慣れ親しんだすべてのものが、急に遠のいていくようだった。

結婚。子供の頃からの夢と憧れだったその言葉が、まるでただの冷たい取り引きのよう聞こえる。

「でも、どうして？」

「婚外子は認めない」彼はきっぱりと告げた。「ロメロ家は六百年にわたり脈々と続いてきた家柄だ。僕にはその血を守る義務がある。自分の子を、そうと知りながら、外で産み育てさせるわけにはいかない」

リリーは震えながら立ち上がり、ゆっくりと彼のそばへ近づいた。彼女はトリスタンの前に立ち、彼の目に影を落としている感情の正体を読み取ろうとした。「さっきは私を買収して、この子の存在を自分から切り離そうとしたの？ わからないわ、トリスタン。どうして？」

彼の口元に浮かんだ苦い笑みに、リリーは思わず息をのんだ。

「その子に、出自をはっきりさせてやりたいんだろう？」うっとりするような、優しい声だった。「ロメロ家の人間になれば、六世紀分の、君を身動きできないほど縛ってくれるルーツが手に入る。だが、だからといってそれが自分のアイデンティティーになるわけじゃない。逆に、そのせいで自分のアイデンティティーを持つことなどほとんど不可能だ。だからこそ僕は、決して子供は持たないと決めていた」

彼はしばし言葉を止め、顔に手を当てて、じっとしていた。

「自分がどんな家系のもとに生まれてくるか、僕には選択の余地がなかった。だが君は、その子のために選べるんだ。被害は最小限に留めるべきだ、リリー。逃げられるうちに、逃げた方がいい」

リリーは心が焼かれるような気がした。「私たちの子供よ」彼女は静かに言った。裸足の下の芝は冷たく、寒さに身体が小刻みに震えているのがわかったが、リリーの澄んだ声は力強く、落ち着いていた。「私は家族というものを信じてるわ、トリスタン。結婚も……」

かすかな希望が、蝶のようにリリーの胸の中で舞い始めた。トリスタンは、私がつと欲しかったものを与えてくれようとしている。結婚と、家族。私がついていかなかったもの。おとぎばなしのようなハッピーエンドの結婚とは違うけれど、私はいつも、子供にはちゃんとした家族を与えてやりたいと心に決めていた……。

「だがこれはいわゆる普通の結婚とは違う。あくまでも形式的なものだ」  
「どういうこと？」リリーはささやいた。

トリスタンはぞんざいに肩をすくめた。「僕には僕の生活がある。それを諦めるつもりはないし、共有するつもりもない。僕の妻になったとしても、僕がどこでなにをしているのか、君に尋ねる権利はない」

「そんなの、結婚とは言えないわ」リリーは激しく言い返した。心の内に、またして

も虚しさが広がっていく。「そんなの、ちゃんとした家族と言えない」

トリスタンはジャケットを脱ぎ、震えている彼女の肩にかけた。「そうだな。だが僕にできるのは、せいぜいそれくらいだ。僕は君を幸せにはできないんだよ、リリー。いい父親にもなれない。それが欲しいなら、別の誰かを探すことだ」

リリーはジャケットの両端を引き寄せた。シルクの裏地に、彼の香りとぬくもりが残っている。思いもよらない優しさを示され、彼女の中で、再び心もとない希望が息を吹き返した。トリスタン・ロメロの暗い貴族的な顔を見上げると、そこには痛みが映っている。リリーの心はたちまちあの夏の夜の塔へと戻っていった。

私は彼を抱き寄せ、彼の鼓動が落ち着くまで、ずっと髪を撫でていた。彼がなにに苛まれていたのかはわからないけど、彼の恐怖を追いやり、眉間のしわが消えるまで、私はずっとそうしていた。そのわずかな間だけ、彼の心に触れることができた気がした。もう一度、そうしたい。一晩だけじゃなくて、一生。この子のために。

私は愛を信じる。結婚と家族を信じる。リリーは顔を上げ、まっすぐにトリスタンを見た。

「わかったわ。そういうことなら……結婚します」

トリスタンはたじろぎ、一瞬だけ目を閉じた。その目を再び開けたとき、さつきかいま見せたさまざまな思いは、もうすべて覆い隠されていた。

「わかった。それが君の選択なら」冷たく突き放すような言い方だったが、力ない諦めの響きも感じられた。「とりあえず、人に話すのは待ってくれ。親友の婚約披露パーティーで、自分たちの電撃結婚を発表するのはふさわしくないからね」

言うなりトリスタンは踵きびすを返し、城の玄関に向かって歩き始めた。

「スカーレットに嘘はつけないわ」

「嘘は無理でも、演技くらいはできるだろう。今から僕たちは、秘密の婚約者だ」  
リリーはその場に座ったまま、去っていく彼をただ見つめていた。

「なにをたくらんでる？」

トムの声はいつもと同じ軽い調子だったが、トリスタンはだまされなかった。トムは一見、愛想がよく、自分を卑下するようなどころがあるが、実際には頭脳明晰で勘

も鋭い。そうでなければ、オックスフォードで首席にはなれない。トリスタンでも容易にごまかせる相手ではなかった。

トリスタンは大きな石の暖炉に寄りかかり、グラスの中身をゆっくりと口に運びながら、部屋全体を見渡した。「べつに。なぜそんなことを訊く?」

スカレットをトムの一族に迎えるための正式な挨拶が終わり、新たにシャンパンの栓が抜かれて、客たちは再び思い思いの相手と話している。リリーは窓辺に立ち、スカレットの両親と話していた。夫妻の顔からは、先ほどまでの怯えた表情がようやく抜けつつある。薄れゆく夕焼けの空が、リリーの青白い頬に赤みを添えていた。「それだよ」トムが穏やかに指摘した。「この二時間ばかり、君は彼女から片時も目を離さない」

グラスを持つトリスタンの手に力がこもった。彼はなんとかリリーから視線を引きはがし、トムに顔を向けた。

「おいおい、婚約したとたん、お堅いことを言うんだな。彼女は美人だ。男なら誰だって美人を見るだろう」

「見るだけですむならね」トムは警告を笑顔でやわらげた。「リリーは優しいんだ。彼女には、花を贈ったり、ベッドに朝食を運んでやったりするような相手がふさわしい。君みたいに——」

「ダイヤやオーガズムを与える男ではなく？」トリストアンは遠慮なくさえぎった。「僕に言わせれば、そういうのも悪くないはずだ」

「それは君が、人生には金とセックス以上のものがあることを理解してないからだ」  
「さんざんな評価だな」トリストアンはグラスの中身を勢いよく飲み、顔をしかめた。

「僕もそろそろそういう生活を卒業して、身を固めることにしようと思ったらどうする？」

トムは笑った。「そのグラスの中身は本当にただのトニックなのか、それとも学生時代によくやったようにウオッカで割ってあるのか訊くだろうね。それから、豚が空を飛んでないか、今日はエイプリルフルカを確認する」彼はトリストアンに腕をまわし、背中を叩いた。「君が結婚する日には、素っ裸になって堀を一周泳いでやるよ」彼は笑ってつけ加え、ほかのゲストのもとへ戻っていった。

しかし、トリスタンは笑わなかった。「約束だからな」

グラスの中身が、本当にウオッカならよかった。

子供……。

彼のまなざしは、否応なくリリーのもとへと戻った。彼女は今、窓際の椅子に腰を下ろし、スカーレットの母親と熱心に話しこんでいる。というより、スカーレットの母親が熱心に話しているようだ。リリーはわずかに首をかしげ、考えこむような表情で聞いている。初めて彼女を見たときもそうだったが、額にかかった髪を耳の後ろにかける、優しくうつとりするようなしぐさに胸がしまった。

トムの言うとおりで。彼女に必要なのは、優しくて善良で、彼女を愛することのできる男だ。

僕は決してそういう人間にはなれない。

トリスタンの人が変わったような態度を目にしても、リリーは驚かなかった。彼はなにをさせてもすばらしいのだから。

リリーを部屋の向こうから熱く見つめ、秘密の婚約者<sup>レ</sup>を完璧に演じている。驚きはしないが、シヨックだった。

もちろん彼女も、精一杯の演技をしていた。スカーレットの弟ジェイミーと並んで立ち、笑顔で言葉を交わしながら、なに食わぬ顔でグラスを口元に運んでいる。つわりに伴う吐き気も、悪名高いプレイボーイとの愛のない結婚を承諾したばかりだという現実もなかったことにして、部屋の向こうから注がれる未来の夫のまなざしを、当然のように受け止めている。

未来の夫……。

そんな家庭的な言葉は、彼にはまったく似合わない。まわりにこれだけ大勢の人がいても、遠くから見つめられるだけで、私は罪深い欲望に身をよじりそうになるというのに。

ジェイミーは、大学で始めたバンドの話をしている。漫然とあいづちを打ちながら、リリーはちらりとトリストランのいる方をうかがった。彼は大きな石の暖炉に寄りかかり、トムのいとこの少女と話している。

そのとき、あたかも見えない糸に引かれるように、トリスタンが顔を上げ、ふたりの視線がびたりと合った。彼の目に潜む欲望に気づいた瞬間、リリーは彼の大きな手で喉をつかまれ、シルクのベッドに押しつけられたような錯覚に陥った。

トリスタンの顔に笑みが浮かんだ。

それは昇る朝日を思わせた。リリーの身体に、ぬくもりと希望がゆつくりと広がっていく……。

「へえ。おめでとう、ミス・アレクサンダー。どうやら億万長者を引き当てたようだね」

ジェイミーがおもしろそうにささやき、リリーは我に返った。けれども、あわてて振り返った彼女が言い訳を思いつくより先に、彼は言った。

「ほら、こっちに来る。僕はこのへんで退散するよ、幸運を祈る」

リリーは引き留めようとしたが、急に口の中が乾いて、言葉が出なかった。ジェイミーが人混みに消えると、彼女はとっさに壁を見上げ、肖像画の列に見入るふりをした。

「そろそろ行かないか？」

スペイン訛のハスキーな声が耳をくすぐり、リリーの背筋が震えた。トリスタンは彼女の後ろに立つと、肩にかかった髪を優しいしぐさでそっと持ち上げ、耳にかけた。触れられたところがかかと熱くなる。彼の指が炎となってリリーの背を伝い、腰まで下りてくる。これではとても、まともにものが考えられない。

「でも……今夜はここに泊まる予定なの」

「予定はあくまでも予定でしかない、スイートハート」彼はリリーを抱き寄せ、うなじから顎へ、そして耳たぶへと、そっと唇で辿った。「君の荷物は僕の車に運ばせた。家まで送るよ」

リリーは口をきくこともできなかった。

できたとしても、抗議しようとは思わなかっただろう。

## 6

見事な変わり身で情熱的な婚約者を演じたトリスタンは、同じく見事な変わり身で演技をやめた。

それにひきかえ、リリーは車の助手席に座ってからも、先ほどの愛撫の名残で全身が激しくうずいていた。彼女はこっそりトリスタンのようすをうかがった。ストーウエル城を出てからというもの、彼はずっと自分の殻に閉じこもっている。ダッシュボードのライトに照らし出された顔は、今も完全に無表情なままだ。

ハンサムな他人。リリーは思わず身震いした。

「寒いのか？」トリスタンが尋ねた。

「いいえ——でもやっぱり、少し寒いかしら」

彼はヒーターのスイッチを入れた。温かい空気が、リリーの身体をそっと撫でた。「なるべく早く式を挙げよう」そう言うなり、彼はスピードも落とさずにカーブを曲がった。「今後、一、三週間の仕事の予定は？」

リリーは肩をすくめた。「たいして入ってないわ。アフリカから戻って体調がよくなかったから、新しい仕事は入れないようにエージェントに頼んであったの。そして、妊娠のことがわかって……」その言葉を口にしたとたん、リリーの胸に小さな明かりが灯った。トリスタンがもたらすような炎ではなく、もっと甘く優しい、キャンドルのような光。「二週間後にはローマで香水の広告の撮影があるけど、それさえすめば、十二月のはじめまではとくになにも……」

ふと笑い出しそうになるのをリリーはぐっと抑えた。まるで歯医者予約だわ。「わかった」トリスタンはそっけなく答えた。「それじゃあ、予定はそのまま。結婚に必要な手続きは任せてくれ。君にはローマからバルセロナへ直行してもらい、そこで式を挙げよう」

リリーは勢いよく振り返った。「バルセロナ？」

トリスタンは一方の口の端だけで、皮肉っぽく笑った。「君はロメロ家の花嫁になるんだよ。式はスペインで挙げるしかないだろう」

リリーの胃は締めつけられ、喉には砂がつまっているような気がした。無意識のうちに慰めを求め、彼女はおなかに手を当てた。

ロメロ家の花嫁。

「そうね。考えてなかったわ。あなたのご家族は——」

「それは気にしないでいい」彼はさえぎり、それからふと顔をしかめた。「君のほうは？ 家族も呼んだ方がいいのか？」

「いいえ、まさか」リリーは窓についた霜を払い、外の闇に目を向けた。「母はインドのどこかの僧院で、エネルギーのバランスを追求してるわ」

母のスザンナ・アレクサンダーは、昔から魂の悟りと内なる平和の追求に熱心だったが、リリーがモデルの仕事を始めてからは、その仕送りをつきこむようになった。

「お父さんは？」

リリーは静かに笑った。「どこへ招待状を送ればいいのやら」

トリスタンは黙ってバックミラーをのぞくと、いきなりほかの車を追い越し、闇に  
向かって加速した。

「十二月のはじめになにがあるんだ？」ずいぶん間を置いてから、トリスタンが尋ね  
た。

「アフリカに戻るの」リリーの声に、自然と熱がこもった。「まだ決まったわけじゃ  
ないけど、小児医療のチャリティ団体の親善大使にならないかと誘われてるの。でき  
ればモデルの仕事はやめて、フルタイムで引き受けたいと思って。向こうへ行ったの  
は、まだ一回だけだけど……」彼女は言葉につまった。「その、あなたとのことがあ  
った翌日——」

「たしかにそういうことを言ってたな。そこで君はおなかをこわし、我々は今の状況  
に陥ったというわけだ」彼は短く笑った。「まさか本気で戻るつもりじゃないだろう  
な」

リリーの身体を、小さな怒りの矢が駆け抜けた。「あなたこそ、まさか本気で訊い  
てるわけじゃないでしょう？ 私に向こうで見てきたものを目にしたら、あなただっ

て……。病気で栄養失調の、身寄りのない子供たちや、衰弱しきつて母乳も出ない、赤ちゃんを抱くことすらできない母親。十歳の少年が父親代わりに弟や妹たちの面倒を見ながら、なんとか離れ離れになるまいと——」

「わかった、わかった。人道についての講釈はけっこうだよ」

退屈だと言わんばかりの口調は、彼女の怒りをさらにあおった。「私だって、貴族の家長のお決まりの文句は聞きたくないわ！」リリーは息まいた。「あなたは自分の生活には干渉させないと言いながら、私には、ロメロ家の花嫁として同じ自由は与えないと言うつもり？」

「君はその子を産みたいんだろう？」氷のように冷たい声だった。

「そのとおりよ！ この世のなにより、私はこの子を——」

「それじゃあ、そのアフリカでも最も恵まれない、病気の蔓延している地域が、妊娠中の女性にとって望ましい場所だと思うのか？ 君自身、病気になったんだらう？ またそうならないと誰が保証できる？」

リリーはシートに背をあずけ、顔をそむけて目を閉じた。自分の愚かさに気づき、

恐ろしくなった。同時に、またしても吐き気がこみ上げ、子供自身も自分の存在を主張しているように思われた。外の空気を吸おうと、手探りで窓のスイッチを探した。そしてうっかりドアの取っ手を握ってしまった。次の瞬間ドアが勢いよく開き、冷気がさっと流れこんだ。

トリスタンの反応はすばやかだった。彼は大きく揺らいだ車体を片手で制し、リリーを体で押さえつけて、車を路側帯に寄せた。エンジンが止まり、続く沈黙の中で互いの荒い呼吸だけが聞こえていた。

ゆっくりと、リリーはトリスタンを見上げた。彼はうつむいて目を閉じ、今も片手でしっかりと彼女をかばっている。

「ごめんさい……」彼女はささやいた。

トリスタンは動かなかった。やがて、彼女の腿をつかんでいた手を離すと、ぞっとするほどゆっくりとハンドルに戻し、しっかりと握った。

彼の表情を目にし、リリーの心臓は止まりそうになった。

「これだけは理解しておいてくれ、リリー。僕はいい夫にも、完璧な父親にもなれな

いかかもしれないが、暴君つてわけじゃない。僕は決して君に力づくで言うことを聞かせたりはしない」一瞬、彼の仮面にひびが入り、恐ろしいばかりの苦惱とやるせなさが見えた。リリーは胸を締めつけられ、あえぐように息を吸った。彼女のあらゆる本能が、彼に手を差しのべるように告げている。だが間に合わなかった。彼はすぐに仮面を被り直すと、さらに冷たく隙のない表情になって言った。「僕は愛を与えることはできない。だが、安全なら与えられる。僕はあらゆる手を尽くして君とその子を守る。わかったか？」

シヨックに言葉を失ったまま、リリーはうなずいた。

リリーの家があるプライムローズ・ヒルの住所に着くと、トリスタンは車を止めた。彼は、ビクトリア様式の美しいタウンハウスと、正面を飾る遅咲きの薔薇を見上げ、隣で寝入ってしまったリリーの寝顔に目を向けた。なめらかな肌を街灯の明かりが照らし、美しいカーブを描く頬の下に、長いまつげが濃い影を落としている。カメラマンやファッション雑誌の編集者が見たら、至福のため息をもらすだろう。

彼はハンドルを握り締め、ゆっくりと息を吐いて、目を閉じた。

彼女がこれほど美しくなければ……。

そもそもはじめからこんなことにはなっていないなかったのに。あるいは、なっていたとしても、同じ役をもっと楽にこなせただろう。ビジネスのように。そう、これは単なる法律上の、金と名目の問題にすぎない。

感情の問題ではなく。

いつからか、感情抜きの関係を追い求めることに罪悪感を抱かなくなった。誰ともつきあいが長引かないよう、細心の注意を払い……。

細心の注意が、聞いてあきれる。

ふいにリリーがため息をもらし、小さく身動きした。トリストアンが顔を上げると、彼女は眉間にしわを寄せ、やがて目を開いた。

「着いたの？」リリーは静かに尋ね、体を起こして窓の外を見やった。「ごめんなさい、眠るつもりはなかったのに」彼女はバッグを手に取り、おずおすと彼を見上げた。

「上がっていく？ コーヒーでも——」

「コーヒー？」トリスタンは思わず眉を吊り上げ、皮肉をこめて笑った。「遠慮するよ。だが、結婚許可証を申請するのに出生証明書の写しが欲しい。家にあるかな？」

リリーは視線をそらし、うなずいた。

リリーのフラットを見て、トリスタンは驚いた。旅やパーティで忙しい女性ふたりの住まいなのだから、もっとモダンで、無機的な部屋を想像していた。けれどもそこは、さまざまな美しいもので埋めつくされ、温かな雰囲気を満たされていた。値段や流行りは関係なしに、長い時間をかけて集められ、愛着を持って使われ続けているのがわかる。

リリーは彼に背を向け、居間の隅で引き出しの中を探している。トリスタンはドアにもたれ、部屋全体を見渡した。色あせたベルベットのソファには、ターコイズブルーとラズベリーピンクのシルクのクッションが積み上げられている。壁にはビクトリア女王の時代の油彩画や、クラシックな広告ポスター、写真などが飾られている。それぞれにセンスのよさを感じさせる、興味深いものばかりだった。

彼は唇を噛んで、顔をそむけた。

灰色の猫が開いたままの玄関ドアから入ってきて、彼の脚の間をくぐり、キッチンに姿を消した。そのあとに、最初の猫をそのまま小さくしたような二匹が続いた。

「何匹飼ってるんだ？」沈黙を破り、トリスタンは尋ねた。

リリーが振り返った。赤いリボンで束ねた書類を持っている。

「正確に言えばゼロ匹よ。留守にしていることが多いから。でも、このあたりは迷い猫が多いから、餌をあげられるときはあげて、面倒を見るようにしてるの」リボンをほどこき、いちばん上の書類を手に取る。「あの子猫たちが生まれたとき、母猫もまだ子猫同然だったのよ。かわいそうに、避妊手術をしておくべきだったわ」

リリーは彼に一枚の紙を渡した。トリスタンは受け取るなり、それを見もせず廊下を戻り始めた。「今の我々の状況を考えて、そういう発言は皮肉だな」

彼女はドア口で立ち止まり、うつむいた。「たしかにそうね」

反論もせず、静かに彼の言葉を受け止めるリリーに、彼はたちまち後ろめたい気持ちになった。

「悪かった。卑怯な発言だった」

「いいえ、あなたの言うとおりだもの」リリーは首を振り、彼を見上げた。顔は笑っているが、目は涙で光っていた。

トリスタンは彼女の手からリボンを取り上げ、左手の薬指に巻きつけた。

「なにをしているの？」

「指輪のサイズが知りたい」

一瞬、ふたりの視線が彼女の手に落ちた。日に焼けた力強い手に包まれた、ほっそりとした白い指。

「いいのよ、そんなことをしなくても」彼女は静かな声で告げた。

トリスタンは顔を上げた。「なんだって？」

「結婚なんか、しなくても」

なんて優しい目なんだ。トリスタンは、彼女の指からリボンはずした。苦い笑いが口からこぼれる。「なるほど、そのことか。だが僕がよくない」彼は虚しく答え、片手で髪をかき上げた。「ロメロ家の男は、愛も父性も発揮できない代わりに、得意なことがひとつだけあるんだ」

「なに？」リリーはささやくように尋ねた。

「務めを果たすことだ」まるで呪いの言葉を吐くように、彼は言った。

リリーはうなずき、下を向いた。「結婚も、そうなの？」彼女は静かに尋ねた。「務めだから？」

「そういうことだ。義務感だけでは不足なら、まだ間に合う。へたな期待は抱かないことだ。僕を感情を持った人間に生まれ変わらせようとしても——」

「でも、感情なら、あなたはもう持つてると思うわ」彼女は遠慮がちに指摘し、トリスタンの胸にそっと片手を当てた。「とくに、恐怖という感情は……」

彼の身体をショックが走った。

アドレナリンを直接静脈に打たれたように、トリスタンの全身がかつと熱くなり、冷たい怒りがあとに続いた。手首を乱暴につかまれ、リリーが彼の胸によろけた。そして弾かれたように見上げた瞬間、ふたりの視線がぶつかった。彼女の顔は紅潮し、瞳は挑むように輝いている。

そして、はつきりと欲望を映していた。

トリスタンの下腹部に、どつと血が集中した。ふたりの息遣いが浅く速くなる。

「二度とわかったような口をきくな」彼は声を荒らげた。「君にわかるわけがない。

僕の中にある唯一の感情は……」

野蠻きわまりないやり方だとは、わかっていた。それでも、わざと粗野にふるまうことでリリーがひるんでくれればと思った。だが彼女はひるむどころか、自由がきく方の手で彼の顎にそつと触れた。

「そんなこと、信じないわ」リリーはささやくように言った。

どちらが先に動いたのか、トリスタンにはわからなかった。気がつくふたりの唇は重なり、リリーの指は彼の腕に食いこみ、胸はぎゅつと押し当てられていた。ふだんの彼女の穏やかさからは想像もできないほどの激しいキスは、塔で過ごした、あの夢のような夜の記憶を粉々に打ち砕いた。

彼女が欲しい。彼女さえいれば、僕は……。リリーもまた、飢えたように彼の唇を求めていた。彼と同じ情熱と怒りをもって、残忍なキスに応えていた。

先に唇を離したのは、トリスタンだった。彼はリリーを突き放して背中を起こし、

自製の壁を立て直した。

「君は自分をごまかしてただけだ」トリスタンは意地悪く告げ、顔をそむけた。リリーの驚いた目と裏切られた唇を見ていたくなかった。「君は単なる欲望を、なにかもっと深い、意味のあるものと勘違いしてるんだ。君は美しく魅力的だ。君が望むなら、僕は一日に百回だって君を抱きたい。だからといって、君を愛してるわけじゃない。それを理解してもらいたい」

「そんなことには耐えられないと言ったら？」リリーはささやくように尋ねた。

「それなら君の意思を尊重し、僕も手を触れない。さっきも言ったが、僕は野獣じゃない」

「愛のない結婚か、愛もセックスもない結婚か——」リリーは笑い声とも泣き声ともつかない声をもらした。「そういうこと？」

トリスタンは重いため息をついた。「君と子供の人生から、僕を切り離すという選択肢もあるよ」

リリーの顔は半分だけ陰になっていたが、頬を伝う涙に彼は気がついた。彼女はお

なかに手を当て、彼をまっすぐに見上げると、ゆっくりと首を振った。

「だめよ。この子を父親のいない子にはしたくないわ。だけど、そのために自分の体を売るようなまねもしたくない」

トリスタンは諦めたように肩をすくめた。「わかった。好きにするといい」彼はくると背を向けると、車に向かって歩き出した。「バルセロナ行きについては、詳細が決まりしだい連絡する」

車を出す直前、リリーのシルエットが目に入り、トリスタンの胸に罪悪感がこみ上げた。彼はハンドルに腕を突っ張り、悪態をついた。

なぜだ？

せつかく逃げるチャンスを与えてやったのに。普通の人生を送るチャンスを。なぜ、それほど頑なに拒む？

赤信号で止まったとき、トリスタンは助手席に置いた書類を開いてみた。

「リリー・アレクサンダー。出生地——イングラランド、ブライトン。母——スザンナ・アレクサンダー。父——不詳」

なるほど、そういうことか。喉に虚しい笑いがこみ上げた。自分の子を名前のない子にはしない。出自を知らせてやりたい、と言っていたな。まるで、父親のいないことがこの世で最大の不幸だと言わんばかりだ。

信号が青に変わった。彼は片手で顔をこすり、不必要にアクセルを強く踏みこんだ。なんてことだ。

人は誰しも自分の過去の犠牲者、というわけか。彼は投げやりな気分だと思った。僕自身もそうであることを、はたしていつまで隠し通すことができるだろう？

この続きは書籍でお楽しみください！サンプルV

● ● ● 本書は、2010年10月に本社より刊行された『スペインの侯爵』を改題・再編集し、文庫化したものです。

● ● ● 百合の女

2012年2月20日発行 第1刷

著 者 / インディア・グレイ  
訳 者 / 槇 由子 (まき ゆうこ)  
発 行 人 / 立山昭彦  
発 行 所 / 株式会社 ハーレクイン  
東京都千代田区外神田3-16-8  
03-5295-8091 (営業)  
03-5309-8260 (読者サービス係)  
印刷・製本 / 大日本印刷株式会社  
装 幀 者 / みぞぐちまいこ (ムシカゴグラフィクス)

定価はカバーに表示してあります。

造本には十分注意しておりますが、乱丁(ページ順序の間違い)・落丁(本文の一部抜け落ち)がありました場合は、お取り替えいたします。ご面倒ですが、購入された書店名を明記の上、本社読者サービス係宛ご送付ください。送料本社負担にてお取り替えいたします。ただし、古書店で購入されたものについてはお取り替えできません。文章ばかりでなくデザインなども含めた本書のすべてにおいて、一部あるいは全部を無断で複写、複製することを禁じます。

◎と™がついているものはハーレクイン社の登録商標です。

Printed in Japan © Harlequin K.K. 2012

ISBN978-4-596-42202-6